

仙台市文化財調査報告書第10集

仙台中田町

# 安久東遺跡発掘調査概報

昭和 51 年 3 月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第10集

仙台中田町

# 安久東遺跡発掘調査概報

昭和 51 年 3 月

仙台市教育委員会

## 序

仙台市は宮城県内でも、最も埋蔵文化財の豊富な地域の一つであります。それは、豊かな川と肥沃な平地などに恵まれ、古くから、人々が、この地域に慣れ親しんだ為であります。地下に埋もれ、永い眠りにある埋蔵文化財は、こうした環境の中で、人々がいかなる工夫を積み重ねて社会を作りあげてきたものかを知りうる素材であります。しかし、近年、開発事業の活発化に伴い、地下の埋蔵文化財も、安穩の眠りを続けることは許されない状況に立ち至ってまいりました。このたびの安久東遺跡の調査は、宅地化を目的とする土地区画整理事業の施工に先立って国および県の補助を受け実施されたものですが、仙台市内ではこれまでにない大規模な発掘調査となり、数多くの成果があがりました。この間、資料の盗難といった事態も発生し、甚だ遺憾な面もあり、今後の教訓とすべき点も多々あったようでありますが、ここに、その成果内容を公表するにあたり、多くの方々によって本書が十分に活用され、郷土文化の発展、向上に資することを念願してやみません。

昭和 51 年 3 月

仙台市教育委員会 教育長 佐藤 敬

## 例 言

1. 本書は、1975年（昭和50年）7月21日から1976年（昭和51年）2月9日にかけて実施された、仙台中田第一土地区画整理事業区域内に所在する安久東（あんきゅうひがし）遺跡の発掘調査の概要報告書である。
2. 本報告の内容は、発掘調査の経過、学術的記録と若干の考察を含む。
3. 本文の執筆担当は次のとおりである。

岩瀧康治……………1. 2. 3. 4(1). (2). (3)―B. C. E. F. (4)―A―〈須恵器〉、B.

D. 5(1). (2)―b. c. (3). 6.

田中則和……………4(3)―A〈1～8号各件居跡〉D. (4)―A―〈土師器、須恵系土器および平安時代のその他の土器〉、〈中世陶器〉〈青磁〉〈近世以降の施釉陶磁器〉、C. E. 5(2)―a

なお、遺構および出土遺物の記載にあたって、伊東信雄（仙台市文化財保護委員）、氏家和典（宮城県多賀城跡調査研究所長）、檜崎彰一（名古屋大学教授）、藤沼邦彦（東北歴史資料館研究員）、小井川和夫、丹羽茂、加藤道男（以上宮城県教育庁文化財保護課技師）安田高憲（広島大学総合科学部助手）の各氏より、貴重な御教示を賜わった。

4. 本報告に掲載した図面の浄書などには、岩瀧、田中があたった。
5. 本文中の注釈は、本文末尾にまとめた。
6. 安久東遺跡に関しては、調査期間中に、現地説明会資料を発行しているが本文の記載をもって優先するものと理解して頂きたい。
7. 今回の調査に関する追加、訂正事項などは、将来仙台市教育委員会の責任において逐次公表していきたい。
8. 本書の編集には、岩瀧があたった。
9. 本調査に関する庶務、渉外などは、仙台市教育委員会社会教育課が担当したが、仙台中田第一土地区画整理組合より、多大なる御協力を受けた。

# 本文目次

序

例言

1. 遺跡の位置と環境	1
2. 調査に至る経過	3
3. 調査の方法と経過	6
4. 調査内容	7
(1) 基本層序とその成因等について	7
(2) 遺構の配置状況	8
(3) 発見遺構	11
A. 竪穴住居跡	11
〈1号住居跡〉	11
〈2号住居跡〉	13
〈3号住居跡〉	14
〈4号住居跡〉	14
〈5号住居跡〉	16
〈6号住居跡〉	18
〈7号住居跡〉	19
〈8号住居跡〉	20
B. 小型石室	22
C. 溝状遺構	29
D. 独立柱建物跡	33
E. ビット群	34
F. 埋藏遺構	37
(4) 出土遺物	38
A. 土器類	38
〈土師器、須恵系土器および平安時代のその他の土器〉	38
① 古墳時代前期の土師器	38
② 平安時代の土師器、須恵系土器、その他の土器	42
〈中世陶器〉	49

〈青磁〉	50
〈近世以降の施釉陶磁器〉	50
〈須恵器〉	50
B. 漆器、木製品類	51
C. 石製品	53
D. 鉄製品	53
E. その他〈鹿角製品、自然遺物〉	55
5. まとめと考察	55
(1) 遺跡の形成年代について	55
(2) 遺跡の構成について	56
a. 集落跡（年代、構造、分布など）	56
b. 墳墓群のあり方	58
c. 溝状遺構と中、近世における遺跡の様相	60
(3) 仙台市内の古代集落跡の分布について	60
6. むすび	67

## 図 表 目 次

第1図	安久東遺跡の位置	1
第2図	安久東遺跡地形図	5
第3図	遺跡基本図	7
第4図	安久東遺跡遺構配置全図	9・10
第5図	1号住居跡実測図	11
第6図	2号住居跡実測図	13
第7図	4号住居跡実測図	15
第8図	5号住居跡実測図	16
第9図	6号住居跡実測図	18
第10図	7号住居跡実測図	19
第11図	8号住居跡実測図	21
第1表	安久東遺跡受六住居跡一覧表	23・24
第12図	1号石室実測図	25
第13図	2号石室実測図	26
第14図	3号石室実測図	27
第15図	4号石室実測図	27
第2表	安久東遺跡石室一覧表	29
第16図	溝状遺構断面図	30
第17図	掘立柱建物跡実測図	33
第18図	No.11、12ピット付近実測図	35
第19図	No.6、9ピット実測図	35
第20図	古墳時代前期の土師器実測図	39
第21図	平安時代の土師器壺実測図	42
第22図	平安時代の土師器坏実測図	44
第3表	安久東遺跡出土土師器、須恵系土器、その他の土器一覧表	47・48
第23図	須恵器実測図	50
第24図	漆器、木製品実測図	52
第25図	宝鏡印塔拓影	53
第26図	勾玉、鉄鏝実測図	53
第27図	安久東5号石室実測図	58
第28図	仙台市内の古代集落遺跡分布図	65・66

## 写真目次

写真1	中田地方周辺航空写真	2	写真23	3号石室全景	28
写真2	遺跡調査前写真	4	写真24	3号石室正面	28
写真3	表土排除風景	6	写真25	4号石室全景	28
写真4	遺構精査風景	7	写真26	4号石室正面	28
写真5	1号住居跡全景	12	写真27	5号溝断面	31
写真6	1号住居跡カマド	12	写真28	9号溝断面	31
写真7	2号住居跡検出写真	14	写真29	10号溝断面	31
写真8	4号住居跡全景	15	写真30	11号溝断面	32
写真9	5号住居跡全景	17	写真31	12号溝断面	32
写真10	5号住居跡カマド	17	写真32	10号溝漆器出土状況	32
写真11	鉄線山上状態	17	写真33	堀立柱跡断面	34
写真12	7号住居跡全景	20	写真34	柱痕が残存していた小型ビット断面	36
写真13	カマド脇貯蔵尺	20	写真35	埋蔵出土状況	37
写真14	カマド内遺物出土状況	20	写真36	古墳時代前期の土器	45
写真15	8号住居跡全景	21	写真37	平安時代の土器、須恵器、磁器等	46
写真16	8号住居跡カマド	22	写真38	漆器、木製品、石製品、鉄器	54
写真17	カマド部遺物出土状況	22	写真39	安久諏訪古墳横穴式石室	59
写真18	1号石室全景	25	写真40	伊豆野楡視古墳	59
写真19	1号石室縦断写真	25	写真41	上古川古墳	59
写真20	2号石室検出写真	25	写真42	安久東遺跡西地区全景	61
写真21	2号石室全景	25	写真43	安久東遺跡東地区全景	62
写真22	2号石室右側壁	26			

## 1. 遺跡の位置と環境 (第1図、写真1)

安久東遺跡は、仙台駅南方6.2キロ、仙台市中田町字安久東55他地番に所在する。ちょうど東北本線南仙台駅西側に広がる畑地帯がそれである。遺跡のある中田町は、仙台市の最南部にあって、名取市と境を接している。北側を奥羽山脈に源を発する名取川が流れているが、この名取川がちょうど中流域にはいって、川幅を大きく広げるため、対岸の長町、西多賀地区から、やや隔絶した感を持っている。従って、位置的には仙台平野というよりは名取平野の北部に該当するといつてよい。地形的には、遺跡は名取川の南岸に沿って東西方向にのびる自然堤防上に形成されており、付近は典型的な沖積地帯となっている。標高は約9mである。遺跡南側の畑地との比高は約1mである。なお、名取川は現在両側に堅固な堤防が築かれているためほとんど一定した流路をとっているが、かつては瀬繁に氾濫し、平坦な名取平野の随所を流れ、ためにその旧河道の形跡が随所に残っている。と同時に、その旧河道にそって自然堤防が数ヶ所で形成され、その自然堤防上にいくつかの古代集落跡が形成され、現在の集落の立地もこれとほぼ一致している。つまりこの中田地区では、古代集落跡の分布は現在の集落の分布から類推することが可能である。こうした集落遺跡の立地上の様相は隣接する名取市における様相と類似するものがある。

中田地方の遺跡分布の上で目立つ点は、中小古墳が比較的良好に見られることである。また中

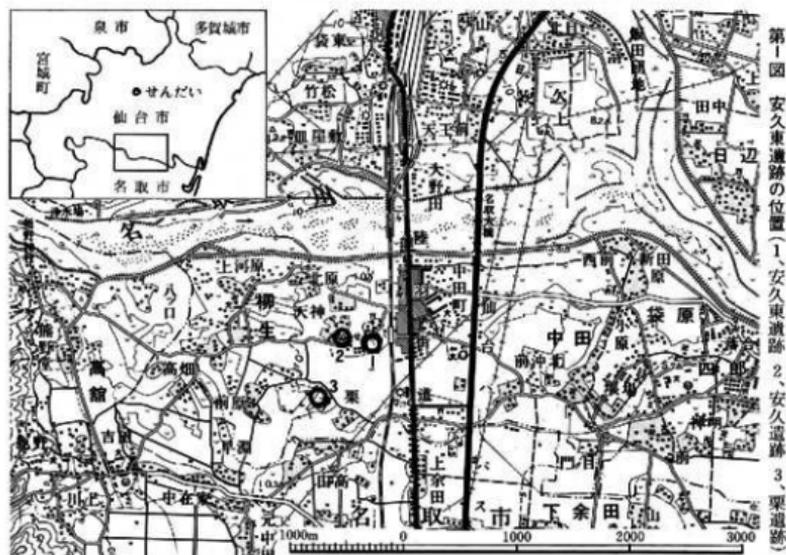




写真1 中田地方周辺航空写真(縮尺1:12,500)(○印が安久東遺跡の位置)

世の古墳群も数多く、<sup>①</sup>これらの点も名取市西北部地区の状況と一連のものと考えてよい。従って、中田地方の文化的、歴史の様相は、名取地方のそれと密接な関連をもつものといえる。

中田地区における最古の人為的な足跡は、縄文・弥生時代には、明白には認められていないと考えてよいだろう。昭和50年2～3月にかけて調査された安久遺跡<sup>②</sup>では、縄文晩期土器片、弥生式土器片などが若干発見されたが、遺構にともなつたものではなかつた。

結局、中田地方における最古の人為的な様相はいまのところ本遺跡発見の古墳時代前期（埴釜式）に帰された竪穴式住居跡に求めることができよう。続く奈良時代には、本遺跡西南方0.9キロほどの自然堤防上に形成された栗遺跡<sup>③</sup>があるが、この古墳、奈良時代の集落の形成は、現在まで知られているところでは全滅的なものではなく、孤立的なものと見られている。だが、続く平安時代以降には、集落の形成は全滅的に広がつたと考えられ、多くの集落遺跡が確認されている。これらの古代集落遺跡は発達した自然堤防と後背湿地という立地上の特色から考え、<sup>④</sup>当然、農業集落であつたと考えられる。「長町や中田の馬を増田まで…」の道中敷え歌で知られる宿場町中田の成立は、江戸時代奥州街道の整備以後のことであつた。

なお、昭和50年2～3月にかけて調査された安久遺跡は地形的に一連のものであるところから、本遺跡と一連の遺跡と考えてよい。本遺跡の残存する推定面積は約13,000㎡と考えられる。

## 2. 調査に至る経過

中田地方は従来仙台市内では文化財調査の空白地域であつた。そうした中で安久東遺跡は、昭和46年に東北新幹線建設予定路線内の埋蔵文化財分布調査が宮城県教育委員会によって実施された際初めて発見されたもので、昭和47年8～10月にかけて建設予定路線内の事前調査が同じ県教委によって実施され、古墳の石室および溝状遺構などが発見され、特に中田地方においては最初の発掘調査として注目された。<sup>⑤</sup>この調査と前後して地元での土地区画整理事業も具体化し、仙台市教育委員会では、これを契機に事業区域内の集中的な文化財確認調査を実施し、それをもとに区域内に所在する文化財のとり扱いについて区画整理組合と再三協議した結果、街路予定部分等組合直営で工事実施する遺跡該当部分については、原因者負担の原則にもとづき組合が建設省の経費補助を含めて経費負担して実施すること、それ以外の部分については仙台市教育委員会の経費負担で調査を実施することを決定した。このとりきめにもとづき、昭和49年3月に栗遺跡の街路予定部（約1,000㎡）の調査を一部実施し、昭和50年2～3月には、栗遺跡（約1,800㎡）および安久遺跡、安久諏訪古墳（計約2,500㎡）のそれぞれ街路予定部分の調査を完了した。

今回の安久東遺跡の調査は組合直営工事区域外の部分（約4,000㎡）について実施することになつたもので、国庫、県費の補助を受けて実施した。

▽予算：5,000,000円（国庫補助2,500,000円、県費、市費各1,250,000円）

▽期間：昭和50年7月21日～昭和51年2月9日

▽調査主体：仙台市教育委員会

▽調査指導：伊東信雄（仙台市文化財保護委員）

▽調査担当：仙台市教育委員会社会教育課

（課長）東海林恒英

（文化財係長）佐藤恂

（主事）鈴木高文、岩瀧康治、朝倉秀之、田中則和、門間美郎、平井章、佐藤俊郎

▽調査参加者：斎藤秀寿、滝口卓、今野章、柳田俊雄、佐藤洋、工藤哲司、渡部弘美、石本弘、宇部則保、安田稔、中島康博、金光正裕、入間川富市、相沢定子、佐藤せい、本郷正良、柿沼利彦、鶴殿茂、斎藤誠、矢戸裕一、渡辺久行、高橋清治、金子敏久、松山よしい、佐藤良子、守利行、駒板正規、日野昇、本郷正三、松崎忠男、西川花三、渡部由一、桜井力子、大宮正子、佐藤信二、嶺岸富夫、庄司富雄、鈴木つや子、柳瀬和幸

▽調査協力：仙台市中田第一土地画整理組合

飛鳥建設株式会社

萩野工務店

鈴木吉太郎、鈴木栄子、岩岐茂男、丹野キヨ、山下公敬

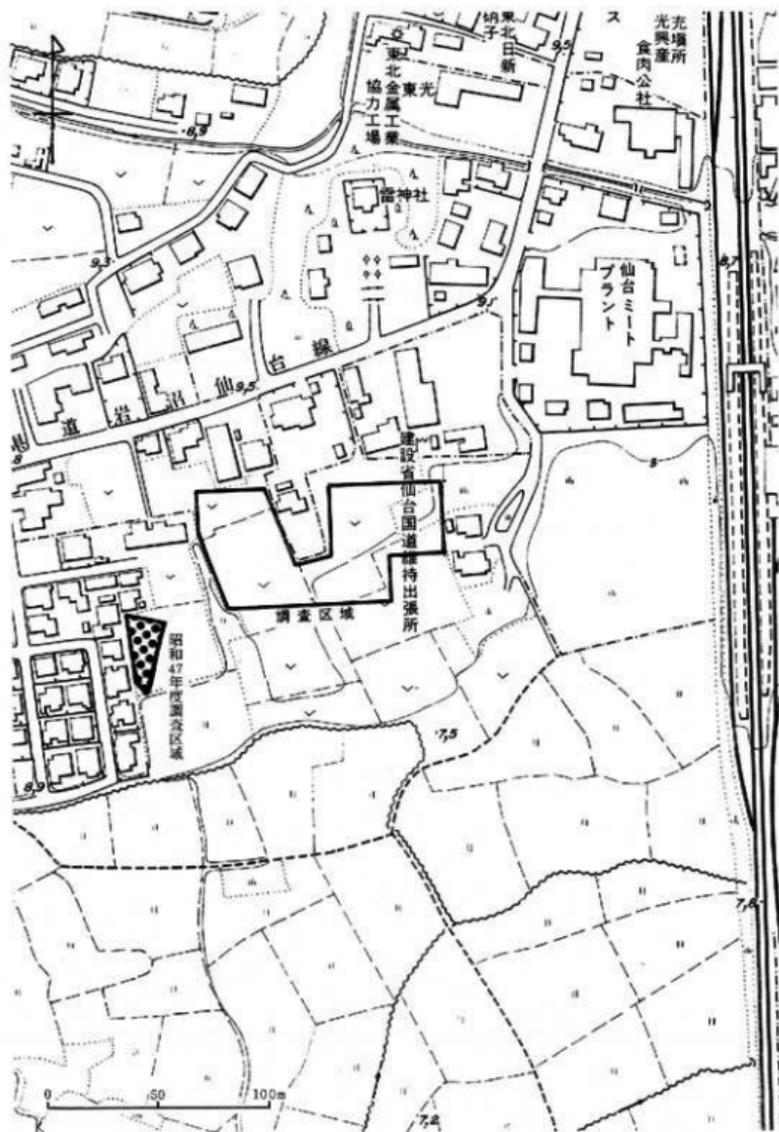
山下公董、山下くら子（中田神社社務所）

小井川和夫、丹羽茂（宮城県教育庁文化財保護課）

▽整理補助：相沢史子、高橋春美



写真2  
遺跡調査前写真  
（南方から撮影  
中田村神社）  
後方の森は



第2図 安久東遺跡地形図

### 3. 調査の方法と経過

安久東遺跡の発掘調査は昭和50年7月21日から開始された。昭和47年新幹線予定路線内の調査区域は今回の調査区域のすぐ西側30cmほどの距離をおいている。事前の遺跡の土質調査で、地山までの深さが50～60mと深いように考えられ、また、調査区域内の全面排土を目標としたので、とりあえず、ブルドーザーによる全面表土排除（深さ30cm前後）を実施した。

表土排除には5日を要し、その後、調査区全域に5mグリッドを設定し、遺物の収納ならびに調査進行中の遺構の変化を相対的に、適確にとらえられるようにし、遺構面の検出には常時ベルトコンベアー6台を動員してあつた。9月17日（46日目）ごろまでに遺構面までの検出をほぼ終つた。遺構面が沖積地特有の微妙な地層であつたのと、夏期の乾燥期にあつたため確認作業は困難をきわめたが、この段階で、8軒の竪穴住居跡、4基の石室および12本余の溝状遺構などの存在が確認された。その後遺構精査に入り、上記各遺構の精査、排土を実施した。この間、溝状遺構については、最大のもので幅6m、深さ2mに達する予想以上の大溝が次々と確認されたため、溝理上の排土にもバックホン、ブルドーザー、ベルトコンベアーなどの機械力を動員してあつた。この溝の精査などは、大略11月6日（86日目）ごろまでにそのメドがあつた。その後、溝以外の最終精査に入り、竪穴住居跡など以外にも多くのピット群や小溝、井戸状遺構などの存在が確認された。12月12日（115日目）ごろまでにほぼ最終精査を終えた。実測は全滅遺り方測量によって行つた。実測は、平面図、レベル記入、細部断面測量、土層断面実測、補足細部実測などの順で行つた。写真撮影は随時実施し、最終全景写真はロー

写真3  
表土排除風景



リングタワーを3段の高さに組み立てて、調査区周縁から撮影した。撮影は一度に全域を含めることが不可能なため、7ヶ所にわたってローリングタワーを移動して撮影した。撮影時期は昭和51年1月30日(146日目)から2月2日(149日目)である。発掘総面積は3,716㎡に達した。出土品の整理は洗浄、注記作業など基礎的作業は調査期間中に併行して実施し、接合、分類、実測などは調査終了後において実施した。

#### 調査成果の公表

は昭和50年11月8日(88日目)に現地で実施した。なお調査期間中に、発掘現場が時折りいたずらされることがあったりしていたが、調査も大詰めに近づいた11月2～3日にかけ



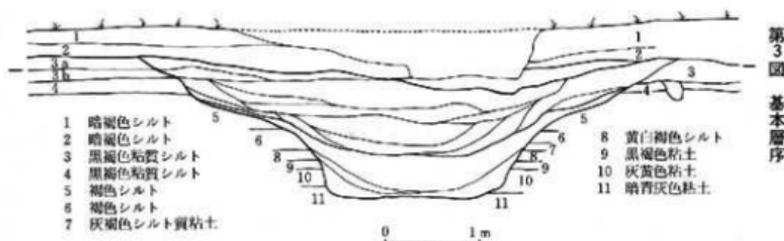
写真4 遺構精査風景

ては、調査事務所内への侵入という不祥事が発生し、貴重な出土品のいくつかが盗難にあった。盗難にあったものは、大溝出土の鹿角製品、漆器椀、土器(完形品)など10点ほどである。ただちに南仙台駅交番所に届け出、地元にも情報提供などの協力を依頼しているが、今日に至るまでなお返却されていない。

## 4. 調査内容

### (1) 基本層序とその成因等について(第3図)

基本的層序は遺跡全般にわたって大差ない。第1層は表土層(現在畑地となっている耕作土)、



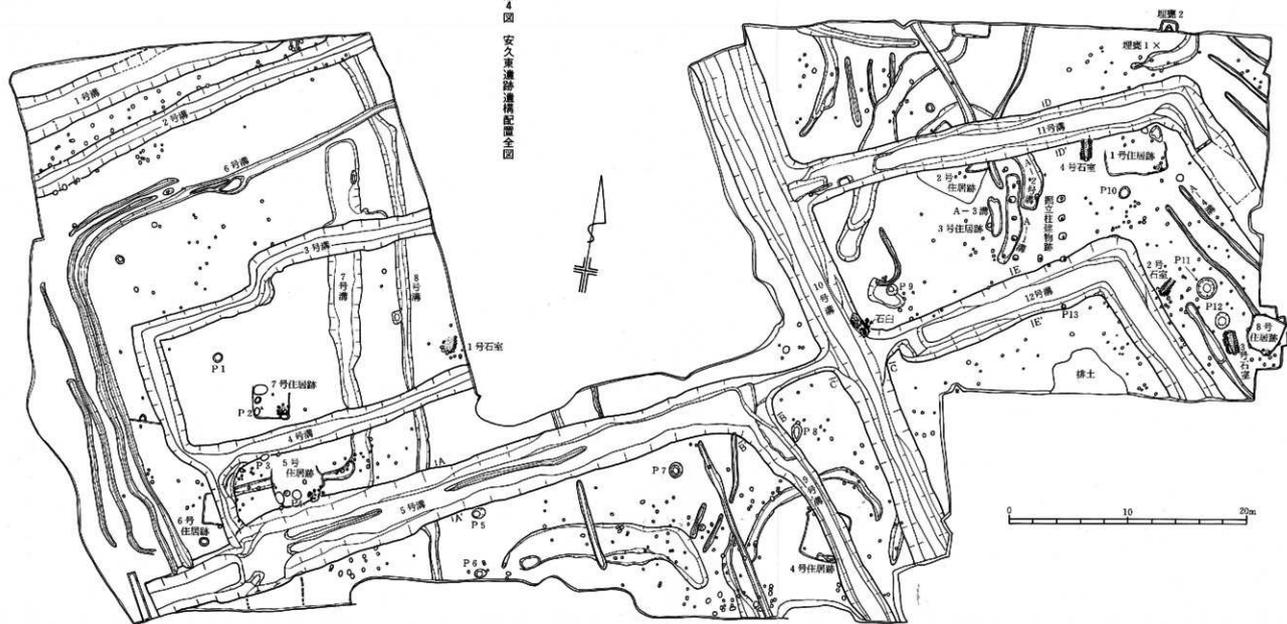
第3図 基本層序

第2層は暗褐色シルト質土層で、第1層と類似するが耕作はあまり及んでいない。第3層は溝状遺構等の確認面となる。この中に、遺物類もよく含まれる。第4層は住居跡、古墳石室等の確認面で、第5層以下は完全に地山となっている。地山は全般に調査区の西から東へかけてゆるく傾斜する。なお地山層は、さらに図のように色調および質的に細分されていくが、次にシルトから粘土へとその質を変化させ、第Ⅺ層においてはきわめて固く、不透水性のものとなっている。後述の溝状遺構および井戸状ピットなどがⅪ層まれ掘りこまれているのは、その不透水性を意識したものと考えられることもできる。

## (2) 遺構の配置状況(第4図)

調査区は図のように中央部に民家があったため、これをとり囲むような東西方向に長い形のものとなる。全体を通してみると、各種の遺構が複合して存在している中で、大型の溝状遺構が、ある一定の企画性をもって配置されているのが先ず目につく。大溝は東北東—西南西方向に直線的に走る5号、12号溝と、これと直交する形で北北南—南南東方向に走る10号溝とを中心として、ほとんどこれから分岐または直交あるいは平行するような形で他の溝が配置されている。この大溝は、他の遺構群(特に竪穴住居跡)を部分的に破壊している。竪穴住居跡は計8軒確認されたが、7、8号以外はすべて溝状遺構によって、その一角を破壊されている。竪穴住居跡同士で切り合っているものはなく、検出間隔は、5、6、7号がそれぞれ3~4mと比較的密接して発見されている以外は10~20mと離れており、配置状況は隣接の安久遺跡、<sup>⑥</sup>近辺の栗遺跡、名取市清水遺跡の例と比較すると疎である。古墳小型石室は計4基確認された。1号石室が中央部で発見された以外はすべて調査区東側にその分布は偏している。石室間の距離は2~3号間が6m、3~4号間が13mと近接しているが1~4号間は55mと離れている。しかし、溝状遺構埋土中には大量の河原石が流入していた点を考えると、本来はもっと多くの石室がこの地域に群集していて、溝状遺構の築造の際に破壊されてしまったと考えるべきであろう。(なお、昭和47年発見の古墳石室と1号墳の距離は約80m、また昭和17年発見の古墳と<sup>⑦</sup>昭和50年3月調査の安久諏訪古墳との距離は約100mである。)その他注意すべき遺構としては、調査区東側中央部で2間×3間の掘立柱建物跡が1棟、深さ150cm以上の井戸状ピットが、これも調査区東、南部を中心として6ヶ所ほどで発見されている。その他全域にわたって、直径20cm前後の多数のピット群が発見されている。中には柱根を残すものも発見されているので柱穴と解すべきものが多いと思われるが、どのような配列になるものかほとんどつかめていない。また、小溝群が多数発見されているが、これらは大溝と方向を同じくするものとそうでないものとあり、前者については大溝に関連、付随するものと見ることも可能である。

第4圖 安久軍遺跡遺構配置全圖



### (3) 発見遺構

発見された遺構としては、A. 竪穴住居跡 8 軒、B. 小型石室 4 基、C. 溝状遺構 10 数本、D. 掘立柱建物跡 1 棟、E. 井戸状遺構など大小のピット群、F. 埋藏遺構 2 基などである。遺構には、種別毎に、各々検出順にNoを付した。

#### A 竪穴住居跡 (第 1 表)

竪穴住居跡としては、古墳時代初頭(塩釜式期)のもの 3 軒、平安時代のもの 4 軒、時期不明のもの 1 軒がある。

##### (1号住居跡) (第 5 図・写真 5、6)

〔重複〕北側を東西に走る11号溝によって切られている。

〔正面形・方向〕南東コーナー・南西コーナー共に隅丸であり、平面形は柱穴の配置から隅丸長方形が推定される。残存する南壁の長さは約 5 m を測る。長軸は東西方向と推定される。

〔床 面〕床面は 2 時期にわたって確認された。最初の(第 1 期)は地山(暗黄褐色粘土質シルト)面を床面とし、第 2 期の床面は、地山の上に、灰褐色粘土質シルトが薄く堆積した後、その上に、黄褐色粘土質シルトを貼って貼床としているものであり、特にそうした状況は竪穴中央部でよく認められる。

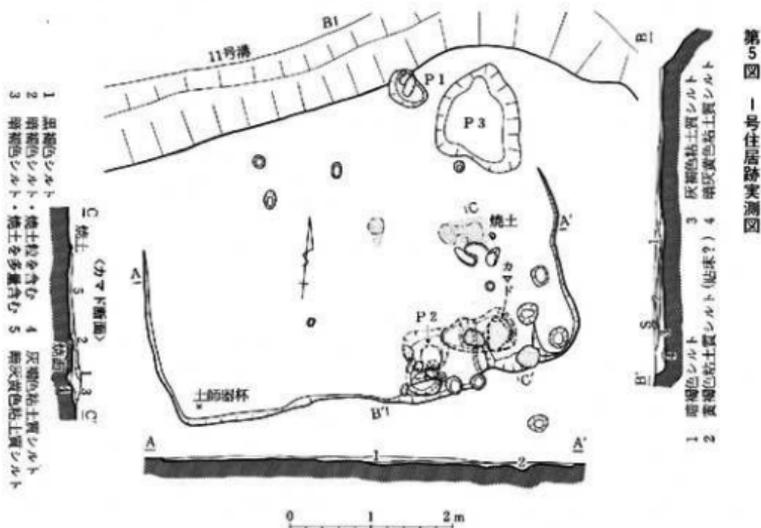


写真5 1号住居跡全景（北から撮影）



写真6 1号住居跡カマド



と思われる数個の河原石が残存している。袖に使用されたとと思われる河原石と河原石の掘り方から推定される規模は、全長0.7m、幅1m。右袖は暗褐色粘土質シルトで、焼土が混入していることから再構築されたものと思われる。カマドの長軸方向からやや東にずれて70cmの地点にある小ピットは煙道煙り出しの痕跡である可能性がある。燃焼部は火熱を受けて、約40cm四方にわたって赤変、硬化している。なお、この燃焼部の焼面の約5cm下には、長さ約35cm、厚さ約3cmの板石が水平に配置されていた。焼面（約20cm四方）は床面上に数ヶ所みられ、2期の床面の両方にみられる。

〔貯蔵穴状ピット〕住居跡遺存部の北東部に、長軸1.2m、短軸1m、深さ約10cm、平面形の不整な浅いピット（P3）が検出された。

〔遺物の出土状況〕第1期の床面からの出土遺物はほとんどない。第2期の床面からは須恵器壺の体部片（南西辺）、土師器杯の完形品（南西コーナー付近）が出土している。

（柱穴）ピットは住居跡内に大小15個検出された。その内、P1とP2（南東コーナー付近）は、掘り方と柱穴痕とが区別され、又住居内の配置状況からみて柱穴と思われる。P2は第2期面の貼床に対応するレベルで配置された(?)数個の河原石を取除いた段階で確認されている。〔カマド〕南壁の東寄りに位置する。右袖の下部（残存高1cm）と補強用として使われたと

〔年代〕床面より出土した土師器環は、いずれも底部回転糸切離して内面黒色処理されているもので、底部及びその周辺に手持ちのヘラ削り調整又はナデ消しのあるもののみである。東北南部土師器編年の表杉ノ入式に相当し、年代は平安時代と推定される。又平安時代に於ても他のヘラ削り調整の全くないもののみ出土する住居跡の年代より遡るものと思われる。

〔2号住居跡〕(第6図、写真7)

〔確認面〕地山面で貼床面を確認した。

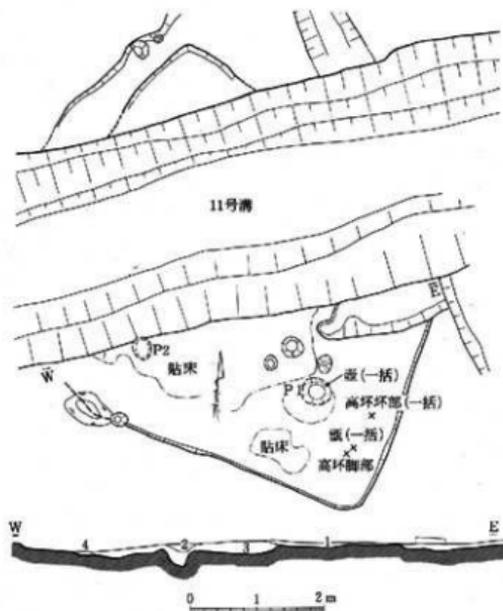
〔重複〕北側を11号溝及び小溝によって切られている。

〔平面形〕残存する南東及び南西コーナーはいずれも隅丸であり、平面形は隅丸方形が推定される。(推定規模 5.6m四方)

〔堆積土〕地山(暗黄褐色粘土質シルト)上に約8cmの褐色シルトの堆積がありその上に貼り床(にぶい黄褐色粘土質シルト)が中央付近にみられる。

〔床面〕貼床面であるが住居跡の南側では、ほぼ同レベルの暗褐色シルト面を床面としている。

〔柱穴〕貼床面ではピットは検出されず、その下の地山面でP1とP2が検出された。掘り方と柱穴痕の区別は認めることができず、又浅い(20~25cm)ために柱穴とは断定し難い。P1の堆積土中からは土師器壺が一括の状態出土している。



第6図 2号住居跡支測図

- 1 褐色シルト
- 2 にぶい黄褐色粘土質シルト
- 3 にぶい黄褐色粘土質シルト
- 4 3よりやや明るいシルト



〔カマド〕住居跡遺存範囲内には検出されなかった。

〔貯蔵穴状ピット〕貼床下のP1に貯蔵穴の可能性はある。

〔遺物の出土状況〕住居跡の東辺、貼床面に対応する褐色シルトの上面

に集中して、土師器が一括状態で出土している。いずれも型的には塩釜式といわれるもので、器形は甕、高坏、甕である。貼り床下の褐色シルト中にも同型式の土師器の混入をみる。又貼床下のP1より土師器壺一括が出土している。

〔年代〕床面出土の土師器一括資料の東西南部土師器編年（塩釜式期）より古墳時代前期と推定される。

### 〈3号住居跡〉

地山面で東側を溝で切られた隅丸の竪穴状の輪郭を確認。堆積土は暗黄褐色シルトである。径約40cm、深さ約10cmの円形のピットを検出。土師器壺の一括及び台付甕の台部が出土している。住居跡と断定する根拠に乏しいが仮に住居跡とすればピット1は貯蔵穴の可能性をもつ。ピット1出土の土師器壺及び台付甕台部は、東西南部の土師器編年における塩釜式の範ちゅうに属するもので、年代は古墳時代前期と思われる。

### 〈4号住居跡〉（第7図、写真8）

〔重複〕9号溝によって、中央部及び北東部を切られている。

〔平面形・方向〕残存する北東、南西両コーナーは隅丸状を呈し、隅丸長方形と思われる。長軸約4.2m、短軸約3.6mを測る。長軸方向はほぼ南北方向である。

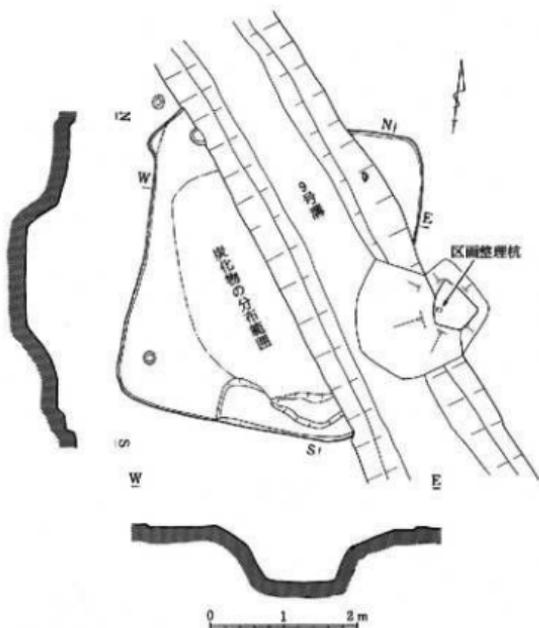
〔堆積土〕第2層は、遺構確認面で第1層をとりまく形で分布する。

〔床面〕確認面で部分的にみられた木炭などの炭化物は、床面に於てほぼ全面に分布する。中には長さ60cmに達する板状の木炭もあり、火災によって廃棄された住居の可能性が強い。焼面も数ヶ所存在する。ほぼ平坦で中央及びその周辺は固くしまっている。

〔柱穴〕ピットはコーナー付近で3ヶ所検出された。

〔遺物〕床面で土師器壺、甕、坏各1点出土している。

〔その他〕  
 カマド・貯蔵穴状ピットは、住居跡遺存範囲に於ては検出されなかった。  
 〔年代〕  
 床面及び最下層の土師器壺の型式一塩釜式一の年代より古墳時代前期と推定される。



第7図 4号住居跡実測図



写真8 4号住居跡全景(南から撮影)

〈5号住居跡〉(第8図、写真9~11)

〔重 複〕 5号溝に南側を切られ、東西に走る小溝を切っている。又、堆積土上面からP1(径約1m、深さ約30cm、堆積土に焼土、炭化物を含む)が掘りこまれている。

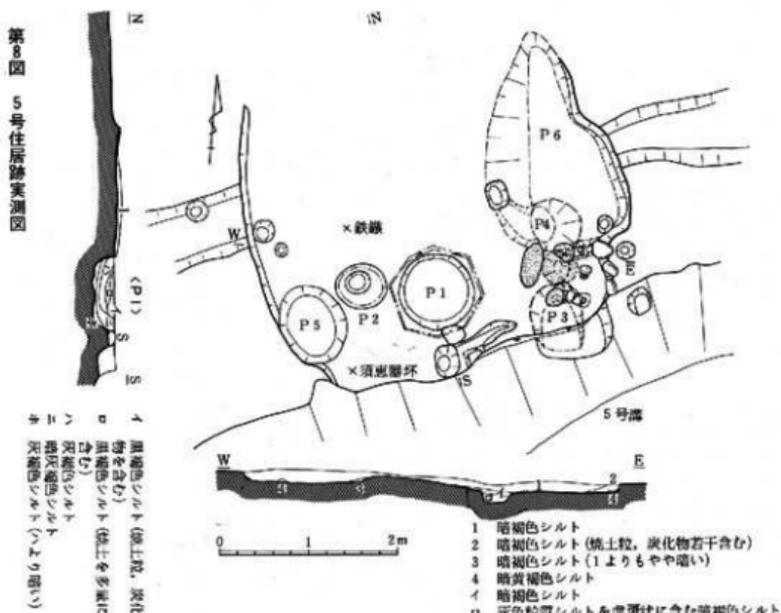
〔平面形・方向〕 平面形は不明、長軸約4.0m、長軸の方向はほぼ東西方向である。

〔堆積土〕 1層は、暗褐色シルト、2層は、焼土を含む暗褐色シルトで東側の壁ぎわに堆積している。又、カマド燃焼部床面の上面には、焼土を含む暗褐色シルトが堆積している。

〔床 面〕 地山(暗黄褐色シルト)を床面としている。床面は東から西へ若干傾斜しており、中央部はやや小高く、炭化物が薄く分布している。

〔柱 穴〕 ピットは住居跡床面で10個検出された、その中で南西コーナー付近に位置するP2は、掘り方と柱痕が区別され、柱穴と思われる。

〔カマド〕 東壁南寄りに位置する。両袖の石組部が残存している。袖部の長さは両袖とも約60cmで、径20cm前後の河原石が燃焼部をコの字形にとりまく状態で検出された。中には移動したものも含まれているようである。最大内側幅は約40cmである。この河原石を暗褐色シルトが支えており、土師器(一部、盗難に会い紛失)焼土を含むことから再構築されているカマドであることが推定される。燃焼部の床面は火熱をうけて赤変、硬化し、この北方に接して河原石の



支脚がすえられている。

又、燃焼部の前方床面で検出された長径50cmの細長い河原石は、他遺跡の例から、本来焚口部の上部を構成したものと推定される。なお、補足調査でカマドの両脇から、長軸が70cm前後、深さ15cm前後の平面形が不整楕円の浅いピットが検出されたが、いずれも、再構築されたカマド以前につくられたものである。

〔貯蔵穴状ピット〕カマドの両脇のピットP3、P4はカマドの再構築以前に貯蔵穴として使用された可能性がある。両ピットは共に堆積土に焼土、炭化物を含み、P3からは土師器坏（内面黒色処理、糸切り離し、黒色処理）が出土している。又、P5は長径約90cm、深さ約10cmの平面形



写真9 5号住居跡全景（東から撮影）



写真10 5号住居跡カマド



写真11 鉄錐出土状況

が長円形のピットで堆積土に焼土を含む。

〔その他のピット〕P 6は補足調査で検出された深さ約10cmの浅いピットである。

〔遺物〕カマドの袖部(石組を支える暗褐色シルト中)から土師器環(回転糸切離し、内面黒色処理、調整なし、ほぼ完形)が出土している。床面からは須恵器環(回転糸切離し、調整なし、9-bタイプ)、鉄製品(鉄釘?)が出土している。カマド内堆積土より須恵系土器環(酸化炎焼成・非調整・回転糸切り離し)1個体出土している。

〔年代〕床面及びカマド袖中出土の土師器環の型式、表杉ノ入式より平安時代である。又いわゆる須恵系土器一環が共件する事から11世紀以降の年代まで下る可能性がある。

#### 〈6号住居跡〉(第9図)

〔重複〕4号溝によって住居跡の東側を切られている。

〔平面形・方向〕残存する北西コーナー、南西コーナー共に隅丸を呈す。従って平面形は隅丸方形と推定される。残存する西壁の長さは約2.7mを測る。

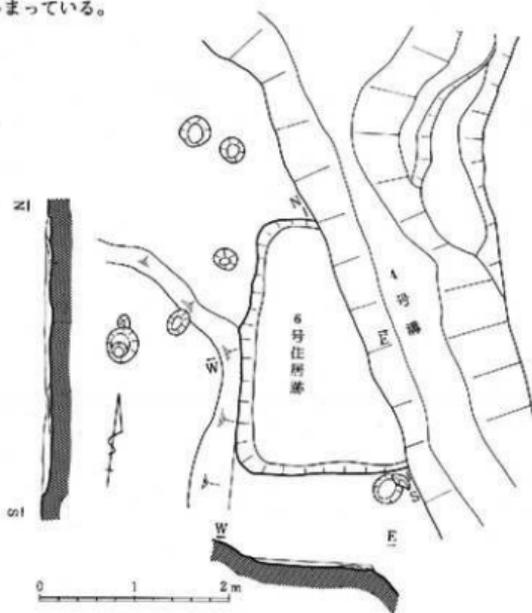
〔堆積土〕基本的には暗褐色シルトが堆積しており、北側壁ぎわには褐色シルトの薄い堆積が認められた。長軸の方向は南北に近い。

〔床面〕地山(暗灰黄色粘土質シルト)面を床面としている。ほぼ平出である。4号溝沿いの中央部は非常に硬くしまっている。

〔柱穴〕床面上に於てピットは検出されなかった。なお、カマド、貯蔵穴状ピットは、住居跡残存範囲内では、検出されなかった。

〔遺物〕堆積土中より若干のロクロ使用土師器細片と棒状鉄製品が1点出土している。

〔年代〕遺物の出土状況などから年代を確定することは困難である。



第9図 6号住居跡実測図

〈7号住居跡〉(第10図、写真12~14)

〔重 複〕 南西コーナー付近に住居跡堆積土上面より掘りこまれたピット (長径10cm、深さ30cm=P1) あり。

〔平面形・方向〕 北壁は確認できなかった。南西コーナーは隅丸であり、平面形は隅丸方形と推定される。残存する南壁の長さは約2.8mを測る。

〔堆積土〕 2層に分けられる。第1層は暗褐色シルト、第2層は黒褐色シルト。なお、カマド周辺の床面には、焼土の薄い堆積がみられる。

〔床 面〕 地山 (暗黄褐色シルト) を床面としている。

〔柱 穴〕 ピットは床面より13個検出されたが、掘り方と柱穴度の区別されるものはなく、又、位置形状等からみて柱穴と断定しうるものは検出されなかった。

〔カマド〕 東壁の南寄りに位置する。長さ80cm、幅45cmの範囲に火熱を受けて赤変しており、中央部は硬化している。又、支脚の掘り方と思われる小ピットも検出された。カマドの南側から貯蔵穴状ピットの西側上縁にかけて、カマドの構築に使用されたとと思われる径20~30cmの河原石が数個移動、整理されたと思われる状況で検出された。煙道は確認できなかった。尚、中

央付近にも

焼面あり、

炭化物がこ

れの西南周

辺に分布し、

その上面に

土師器、須

恵器片の相

当量の出土

をみる。

〔貯蔵穴状

ピット〕 住

居跡の南東

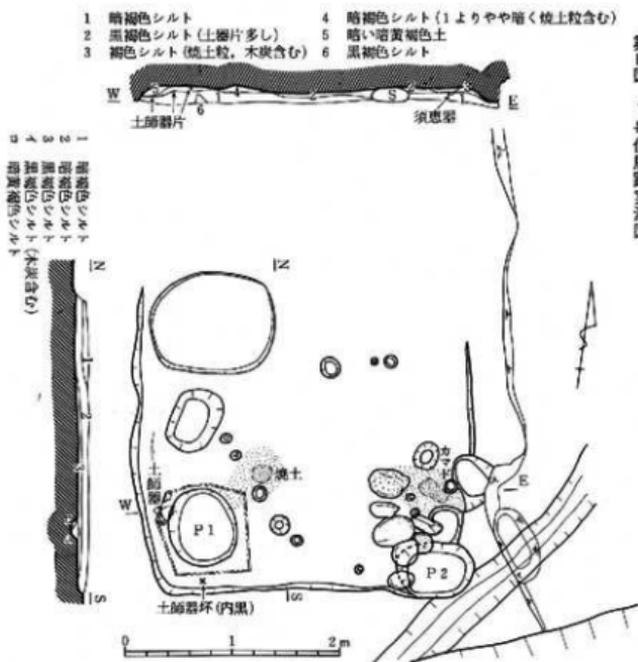
コーナー、

カマドの南

脇に位置す

る。(p2)。

平面形は長



第10図 7号住居跡実測図

写真12 7号住居跡全景（北から撮影）



軸70cm、短軸50cmの  
不整な楕円形で、深  
さ約13cmのゆるやかな傾斜をもつ。堆積土は、灰褐色シルトの単層で木炭片を含む。遺物は出土しなかった。

〔遺物の出土状況〕  
床面より土師器杯(回  
転糸切り底、内面黒

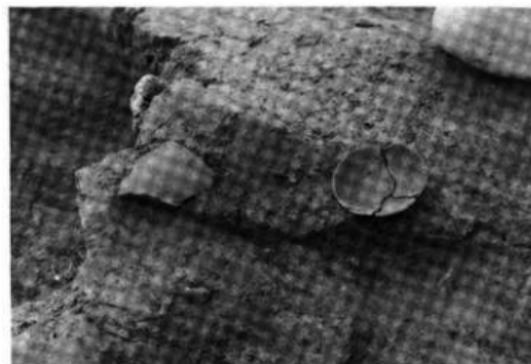
写真13 カマド脇の状況



色処理、非調整)一括(南西コーナー付近)、甕一括(中央周辺の炭化物分布範囲)が出土し、カマドの焼土上面より須恵器杯のほぼ完形品が正位で出土して)が正位で出土している。2層上面及び2層中より相当量の土師器、須恵器の破片の出土をみる。

〔年代〕床面の土師器杯の型式(表  
杉ノ入式)より平安時代である。

写真14 カマド内遺物出土状況



〔8号住居跡〕(第  
11図、写真15~17)  
(重複)北西~南  
東方向に走る小溝に  
よって中央部を切ら  
れている。

〔平面形・方向〕長  
軸約3.2m、短軸約  
3.0mの平面形が不整  
な隅丸方形の住居跡  
である。

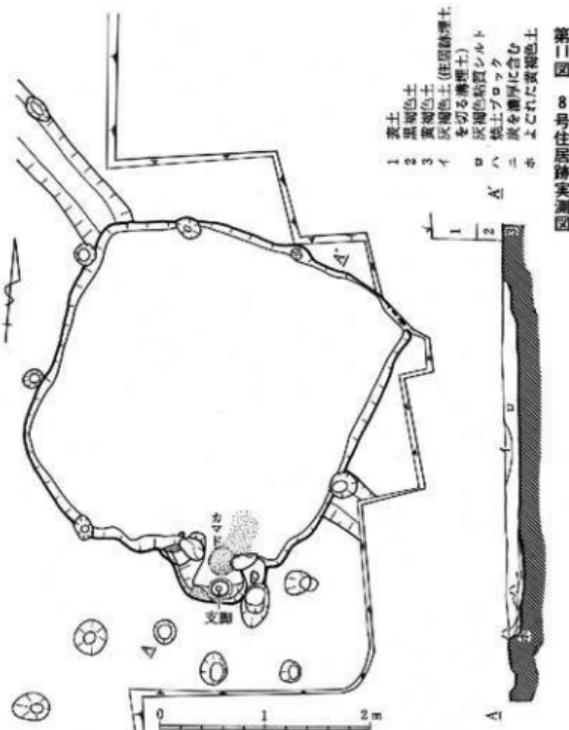
(堆積土) 基本的には、灰褐色シルトの単層である。カマド周辺の床面には厚さ約5cmの炭化物の層が分布している。

(床面) 地山(黄褐色粘土質シルト)を床面としている。床面はほぼ平坦であるが、北壁沿いの床面はやや高くなっている。

(柱穴) 壁沿いに検出された6個のピットは、掘り方と柱穴痕を区別することはできなかったが、配置の状況から柱穴の可能性がある。

(カマド) 南壁の東寄りに位置する。

燃焼部を住居の外に掘り抜いて、構築したカマドである。両袖部が残存している。残存する両袖部から推定されるカマド燃焼部の全長は



第11図 8号住居跡実測図

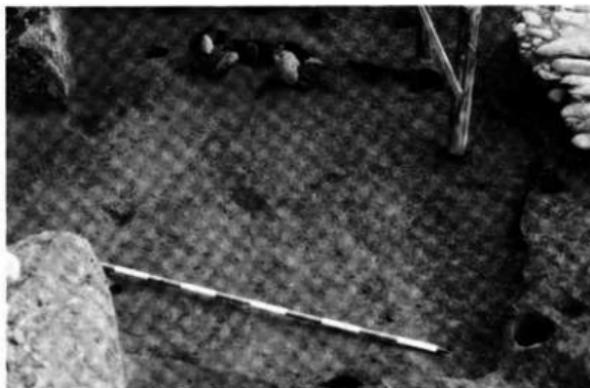


写真15 8号住居跡全景(南から撮影)

写真16  
8号住居跡カマド



写真17  
カマド部遺物出土状況



約50cm、最大巾は1.05mである。両袖部は、小河原石を含む暗褐色シルトで暗黄褐色シルトのブロック及び焼土が混入している。両袖の長さは約30cm、残存高は15cm、内側幅は約40cmである。両袖部の先端には、河原石が据えられている。河原石は両袖部でそれぞれ向かいあって配置され、また互いに内傾している。この両袖に囲まれた燃焼部の床面及び、河原石の内面は火熱を受けて赤変している。又、カマドの奥には、河原石を用いた支脚がすえられている。支脚の頂

部は平らになっている。この支脚の南方約50cmにあるピットは煙道の煙り出しの可能性がある。

（遺物の出土状況）遺物はカマド周辺に集中している。カマド袖部左前方より須恵器環が一括出土しているほか支脚の上に土師器環（内面黒色処理・底部回転系切り離し・調整なし）の完形品が逆位で検出され、又、カマド前面の床面をおおう、焼土の混じる薄い炭化物層の上面で、土師器環（回転系切り底・内面黒色処理・非調整）の完形品をはじめ、土師器、須恵器の破片が相当量出土している。その他床面上で互いに接合する2点の硅化木が出土している。

（年代）カマド周辺床面直上出土の土師器環の型式一表杉ノ入式一より平安時代である。なお、須恵器環9-αタイプ<sup>⑧</sup>が共存していることから、9世紀中葉以降の可能性をもつ。

#### B 小型石室（第12・15号、写真18～26、第2表）

古墳の石室と考えられるものが合計4基確認された。そのうち1号、4号墳は、その一部を耕作や溝の築造の際に破壊されている。各石室に共通する特性としては、いずれも長さ1.8～

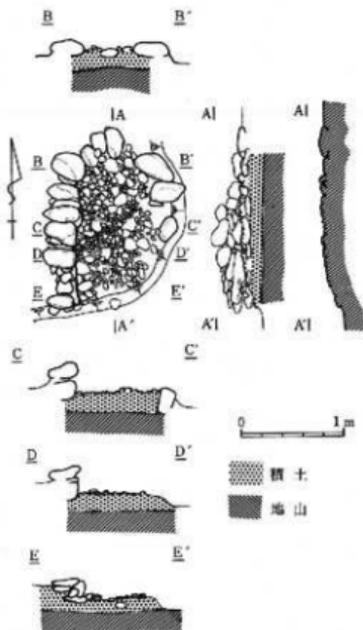
項目	住居跡No	1	2	3	4	5	6	7	8
遺 構 認 別		地山(暗褐色粘土質シルト)	地山面で貼り床面を露出	地 山 (暗褐色シルト)					
取 扱	複	11号溝に切られる	11号溝に切られる	A-3号溝に切られる	9号溝に切られる	5号溝に切られる	4号溝に切られる	住居跡推測上上面より掘りこんだピット有り。	北西-南東方向に走る小溝によって中央部を切られる。
平 面 形		隅丸長方形 ?	隅 丸 方 形	コーナーは隅丸状を呈す	隅 丸 長 方 形	隅 丸 方 形	隅 丸 方 形 ?	隅 丸 方 形 ?	不整隅丸方形
規 模	横	東西5m×南北不明	5.6m四方?	不 明	長軸4.2m 短軸3.6m	長軸約4m	西壁の長さ約2.7m	南壁の長さ約2.8m	長軸3.3m×短軸3m
方 向	向	東 西	不 明	不 明	南 北	東 西	南 北	不 明	北東-南西方向
堆 積 土		1層・暗褐色シルト 2層・(灰質黄褐色粘土質シルト 3層・暗褐色粘土質シルト	1層・(粘土)にぶい黄褐色粘土質シルト 2層・褐色シルト		1層・黄褐色シルト質粘土 2層・褐色シルト	1層・暗褐色シルト 2層・焼土を含む暗褐色シルト	暗褐色シルト	1層・暗褐色シルト 2層・黒褐色シルト	灰褐色シルトの単層
床 面		床面は2時期有り。 第1層は地山面、第2層は灰褐色の上に黄褐色粘土質土をはっている	貼り床面	遺構確認面=ピット(土師器片含む) 換山面とすれば床面の可能性	木炭・灰化物が全面に分布。	中央部、やや高くなっている。	中央部非常に堅固、地山を床面としている。	地山を床面としている。	地山を床面としている。
柱 穴		床面、南東コーナー付近(P1)と北東コーナー付近(P2)	不 明	遺存範囲内になし	不 明	南西コーナー付近のP2は掘り方と柱底有り。	な し	な し	壁沿いの6個のピットに可能性有り
カ マ ド	(位 置)	南壁の東寄りに位置する				東壁南寄りに位置する。		南壁の東寄りに位置する。	南壁の東寄りに位置する。
	(現 存 状 況) (規 模) (特 徴)	右袖下部・油塗用の石灰存 全長0.7m 幅1m 焼面下に板存埋設、掘り出し部(ピット)残存?	住居跡遺存範囲内にはなし。	同 左	住居跡遺存範囲内にはなし。	東壁の右袖部残存、支脚(石)有り。 全長1m、幅70cm 残存高20cm(右袖部) 両脇にピット有り(P3、P4)	住居跡遺存範囲には換山されず。	南壁の東寄りに位置する。長さ80cm、幅45cmの範囲に火熱をうけて赤変。支脚の掘り方有り。	南壁の東寄りに位置する。右袖部残存。残存長50cm 残存最大幅1.05m、残存高15cm。焼面は地山を掘抜いて構築。支脚有り。支脚から50cm南方のピットに掘り出しの可能性有り。
貯 蔵 穴 状 ピ ッ ト		P3 ?	P1 ?	P1 ?	住居跡遺存範囲内にはなし。	P3、P4は時期を異にした貯蔵穴状ピットの可能性有り	同 上	住居跡の南東コーナーカマドの南壁に位置する。平面形は不整形。長軸100cm、短軸50cm。現存高さ13cm。推定土に灰片を含む	
遺 物 の 出 土 状 況		第1期床面ほとんど遺物なし 第2期床面より須恵器、土師器環3点(内輪糸切り・内面黒色処理・底磨手持へう割り及びフナデ酒し)	貼り床面に対応する褐色シルト上面で土師器(短笠式)壺、甕、高坏一括出土、貼り床下のP1より土師器壺一拵。	ピットより土師器蓋(短笠式)一括出土	床面より土師器壺、甕、高坏が各1点出土している。	カマドの袖より、土師器環(内面黒色処理、糸切り磨し、調整なし)床面より須恵器環(内輪糸切り磨し)鉄製品(鉄製)出土。カマド内埋積土より須恵器片(酸化炭成、非調整・内輪糸切り磨し)が1個体出土している。P3より1個体	推積土中より若干の土師器細片と棒状鉄製品が1点出土しているのみ。	床面より土師器環一拵(内輪糸切り、内面黒色処理、非調整)壺一括出土。カマドの焼土上面より須恵器片完形が正位で出土。	遺物はカマド周辺に集中して出土。支脚上に土師器環(内面黒色処理・糸切り磨し、調整なし)床面直上で土師器環(内輪糸切り、内面黒色処理、非調整)が積位で出土(写真)
そ の 他				住居跡とは断定できない。					
		平 安 時 代	古 墳 時 代 前 期	古 墳 時 代 前 期	古 墳 時 代 前 期	平 安 時 代	?	平 安 時 代	平 安 時 代



写真18 1号石室全景（西から撮影）



写真19 1号石室縦断写真



第12図 1号石室実測図

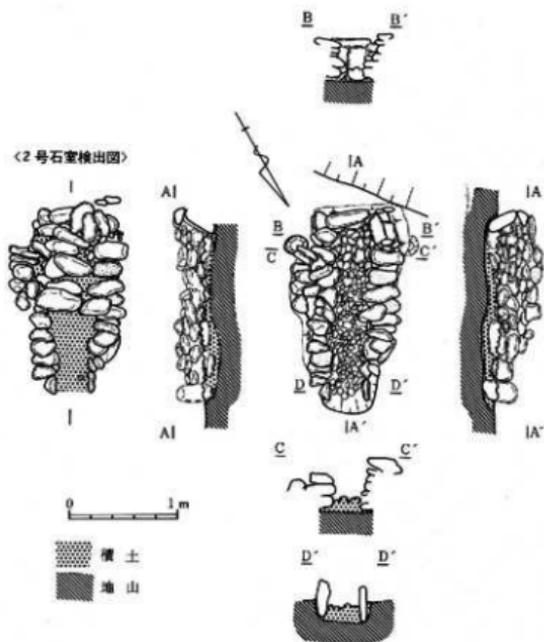


写真20 2号石室横出写真



写真21 2号石室全景（北東から撮影）

第13図 2号石室実測図



2.0m、幅40cm前後と形態的に小型であること、内部から副葬品類が全く検出されないこと、小型の河原石類を2〜4段に積みあげ、底面に小玉石を敷きつめていること、築造技術の上では地山を掘り凹めて、側壁および奥壁の石を積み、それらを粘土を張って、その上に小玉石を敷きつめて、石室底面としている。墳丘の積土と

写真22 2号石室右側壁



見られるものが明瞭な形で確認されていない。構造的には横穴式石室類似のスタイルをとるが、玄室、玄門、羨道といった各部の分化が全く見られないことなどをあげることができる。

この石室の年代については、出土品が全く見られないので確定は難しいが、3号石室の底面

下の積土層中から土師器環（内黒、回転糸切底）が出土しているので、3号石室については上限年代は9世紀ごろと考えられる。2、4号石室も形態構造の上でほとんど類似するので同一時期と見られる。1号は、遺存部は少ないが、構造的には奥壁石の配置にやや入念きが見られること、規模の上で2〜4号よりもひとまわり大きい点で異質であり、むしろ昭和47年度発見の石室<sup>20</sup>に類似する面があり、2〜4号よりは逆り、7世紀後半ごろのものと考えられる。

图 15 图 4 号石室平面图

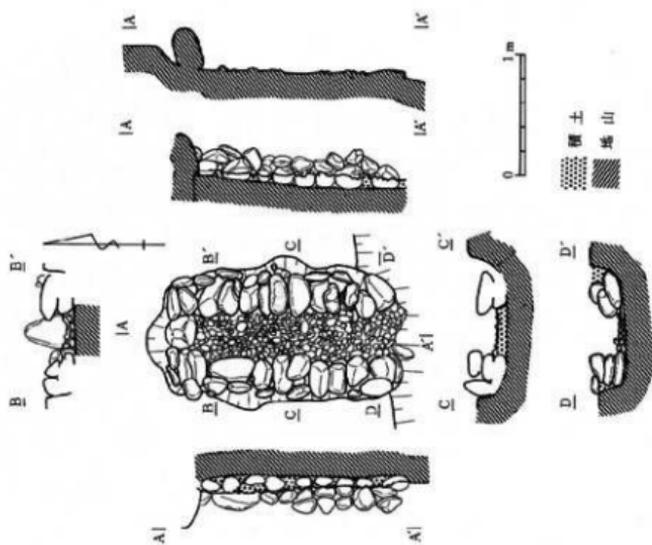


图 14 图 3 号石室平面图

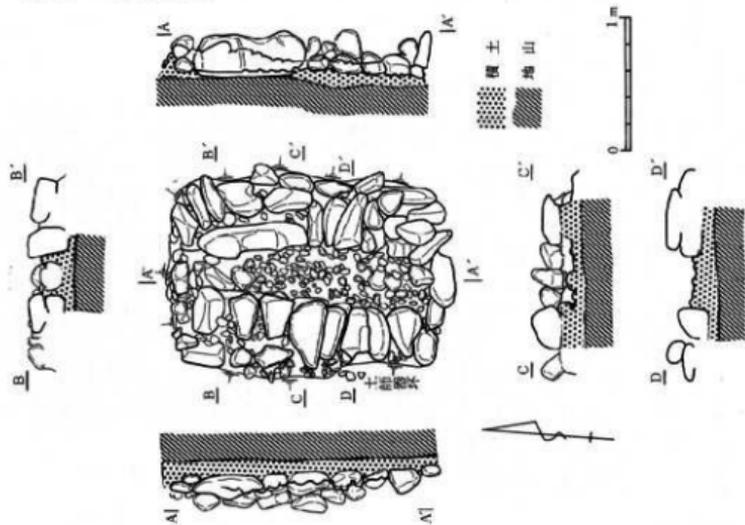


写真25 4号石室全景（北から撮影）



写真23 3号石室全景（北から撮影）



写真24 3号石室正面（西から撮影）



写真26 4号石室正面

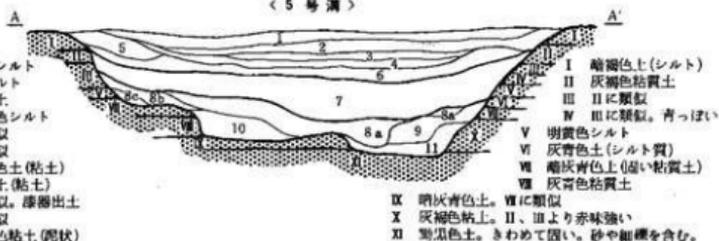


	形態(保存状況) 軸方向	長さ(内のり)	幅(内のり)	高さ (敷石面から)	石積みの状況	備考
1 号	奥壁石(南側)が丸味をもって配置された長方形、入口部分(北側)が破損欠失、天井部欠失、軸方向N E 11° 00'	1.5m (現存)	0.8m	0.25m	小口積み2~3段(現存) 地山の上に積土をし、その上に石積み。	2~4号より大型
2 号	きわめて細長い長方形、北側がやや幅が狭くなる。南北両壁に立石がある。天井部欠失、軸方向N E 8° 40'	1.7m	0.3~0.4m	0.25m (下層) 0.2m (上層)	小口積み2段、 部細長い石を軸と平行方向に使用。	底面玉石層上下2層あり、玉石層下積土中で、内黒糸切武士土師器坏出土
3 号	入口が開いた長方形、入口部分(北東方向)両脇に2つの向かいあった立石、保存良、軸方向N E 42° 00'	1.6m	0.3m	0.4m	小口積み4~5段。	内部埋積土充満
4 号	入口(北側)が開く長方形。天井部、入口部欠失。軸方向N E 6° 00'	1.65m	0.35m	0.2m	小口積み2~3段。	

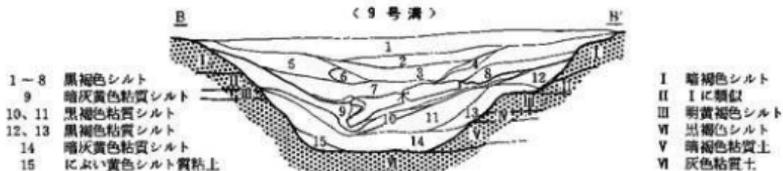
## C 溝状遺構(第16図、写真27~32)

調査区全域で確認された多くの溝状遺構は、おおむね基本層序2層下つまり3層の上面で検出される。それらは、溝の幅や断面形態などから4種類くらいに大別できる。(イ)、幅3~6m、深さ1.2~1.8m、断面逆台形の大型溝(5, 9, 11, 12号溝)(ロ)、幅2m前後、深さ80cm前後、断面逆台形の中型溝(1, 2, 3, 4号溝)(ハ)、幅50cm前後、深さ30~40cm、断面U字形の小形溝(6, 7号溝)(ニ)、その他、幅1m前後、深さ20~30cmの浅いくぼみ状の溝(8号溝他)、などにわけられる。このうち、(イ)~(ハ)はほとんど直線的で、かつそれぞれが平行もしくは直交する配置となっており、きわめて企画図的である。これら主要な溝の名称は、北西方向から東南方向に順次精査、検出順に1~12の番号を付した。ただし、各々の溝が全く独立的な配置となっている訳ではなく、何通りかの連絡が見られる。例えば、今回調査分では最大のものである5号

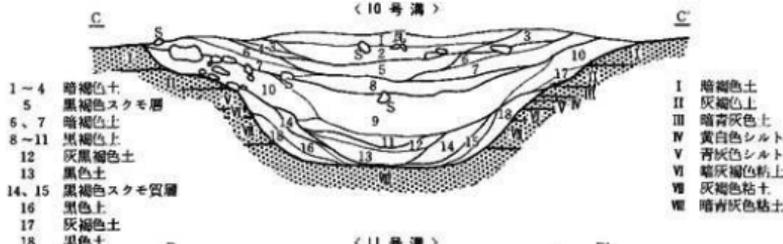
< 5号溝 >



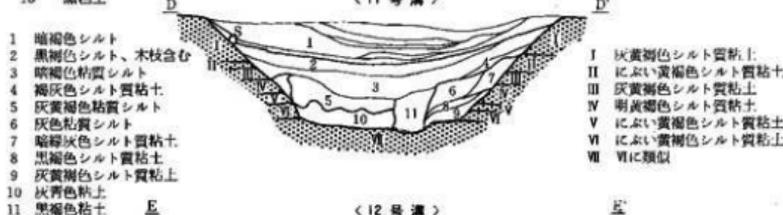
< 9号溝 >



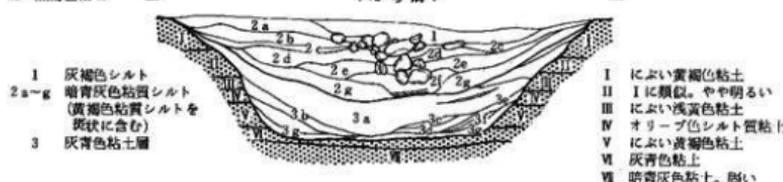
< 10号溝 >



< 11号溝 >



< 12号溝 >



溝は、3、4、6、9、10号溝とそれぞれ連絡している。ただし、10号溝とは底面が直接的に連絡している訳ではなく、浅く狭い溝によって、形式的に結ばれている感がある。また10号溝は、11、12号各溝と連絡しているが、溝の底面そのものは連絡しない。1、2、7、8号の各溝は、今回の調査においてはその連絡関係がつかめなかった。また、7、8号溝は各々、2、3、4、5、6号各溝によって切られており、時期的にはより古い溝であるといえる。各溝の共通的特徴などをピックアップしてみると、①(イ)大型、(ロ)中型の各溝は、溝上半はややゆるやかな傾斜となるが、下半から底面に至る部分は急傾斜を呈し、中段付近に稜を形成する

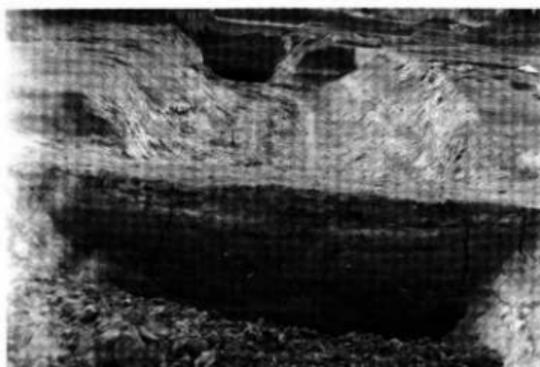


写真27 5号溝東壁断面



写真28 9号溝北壁断面

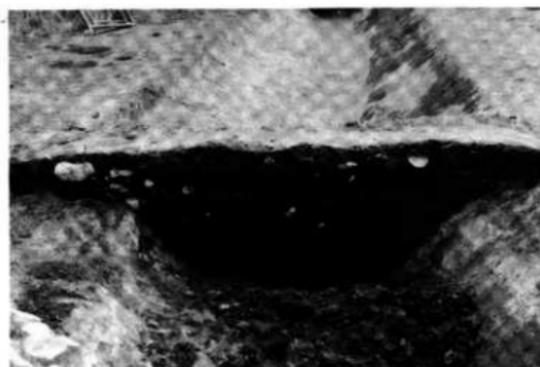


写真29 10号溝北壁断面

写真30 11号溝西壁断面図



写真31 12号溝西壁断面図

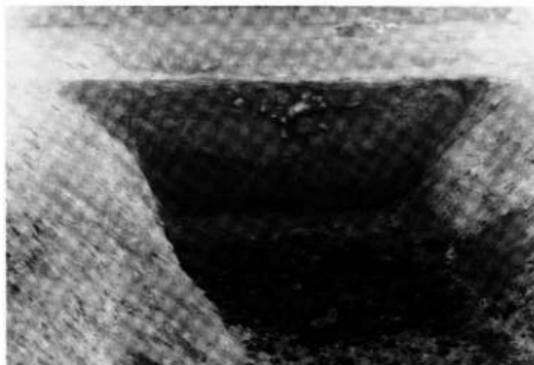
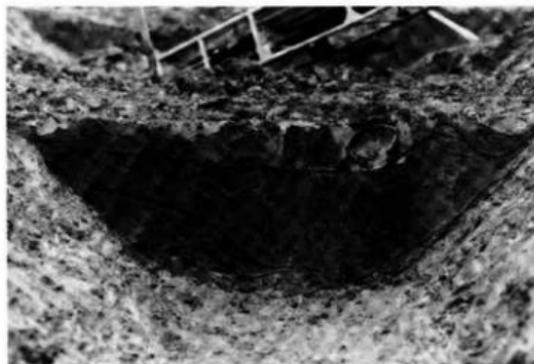


写真32 10号溝漆器出土状況



ものが多い。②上述の溝は底面はほぼ平坦であるが、特に大型のものでは部分的に段差が形成されることがある。③各溝の埋土は、上部から下部へ移行するにつれ、シルトから粘土へと質的变化をもつようである。特に、大型溝の底面付近ではスクモ層やヘドロ状の層が見られることがあり、ある程度洪水したことを示している。④溝からの出土遺物は大型溝では底面付近で、漆器などの木製品、クルマなどの木の実ははじめとする植物遺存体などがいくつか認められた。堆積土中からは、その他中、近世の陶器、青磁破片などが出土した。⑤各溝はほとんど直線的にのびるが、途中で直角方向に曲がるものが多い。溝の方向は、5号溝を中心

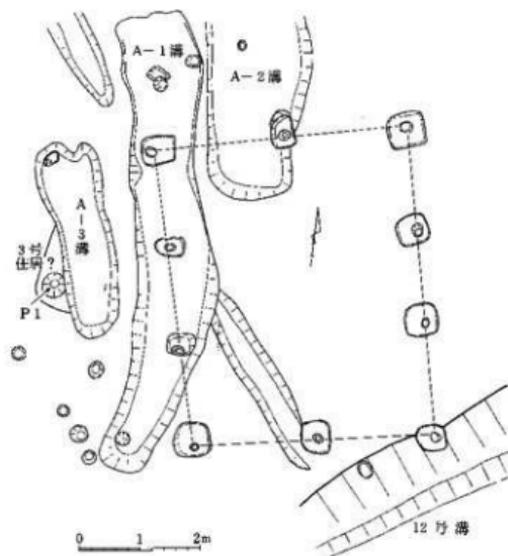
としてみるとNE75°で、これを中心として平行もしくは直交する溝が多い。⑥、(二)の浅いくぼみ状を呈する溝はカーブを形成するものが多く、(イ)~(ハ)によって切られており、(イ)~(ハ)の溝状遺溝群とは、時期的にも、機能的にも異なるものようである。これらの大型、中型溝の年代は、出土遺物から考えて、中~近世と考えられる。

〈各溝の大きさ〉

	(幅)	(深さ)	底面傾斜方向
・1号溝	3.0 ~ 3.3m	90cm	東 → 西?
・2号溝	1.8 ~ 2.0m	60 ~ 70cm	東 → 西
・3号溝	1.7 ~ 2.0m	65 ~ 70cm	東 → 西
・4号溝	1.8m	60cm	東 → 西
・5号溝	4.0 ~ 6.0m	1.1 ~ 1.8m	東 → 西
・6号溝	0.4 ~ 0.9m	25 ~ 35cm	東 → 西?
・7号溝	1.5 ~ 2.8m	15cm	?
・8号溝	0.85 ~ 1.1m	30 ~ 50cm	南 → 北
・9号溝	2.0 ~ 2.8m	65 ~ 75cm	南 → 北
・10号溝	3.5 ~ 5.0m	110 ~ 150cm	南 → 北
・11号溝	3.2m	100 ~ 110cm	西 → 東
・12号溝	4.0m	100 ~ 115cm	西 → 東

※底面傾斜は肉眼では観測されないほど  
きわめて緩い傾斜である。

第17図 掘立柱建物跡実測図



D 掘立柱建物跡 (第17図、写真33)

(位置) 2号住居跡と12号溝の中間に位置する。

(重複) 12号溝とA-1, A-2号溝に切られる。

(規模) 東西2間×南北3間

(方向) 桁方向は、ほぼ南北方向である。

(柱間寸法) 全柱穴で柱痕跡が検出され、その心々距離の測定が可能

写真33  
掘立柱断面図



である。西側柱列は、1.60m、1.73m、1.62mで、東側柱列は1.75m、1.53m、1.95mである。梁行では、北妻西より2.23m、2.02m、南妻西より2.08m、1.93mである。いずれも柱間寸法は不統一である。

(掘り方) 平面形は概して四角方形であり、規模は南北30～60cm×東西35～60cmと一様でない。壁の立ち上がりは垂直に近く、底面は平坦である。深さ(現存)は、溝に切られていない東側柱列で25～28cmであるが建物のコーナー部分の掘り方は40～50cmと深い。堆積土は灰褐色粘土質シルトの単層で、暗黄褐色粘土質シルトのブロックを混入する掘り方あり。

(柱 痕) 全柱穴において検出された。平面形は長径15～20cmの円形もしくは楕円形である。柱痕の底面はほぼ掘り方の底面に一致している。堆積土は暗褐色粘土質シルトである。出土遺物はP1とP2の掘り方堆積土中より土師器細片が若干出土しているのみである。

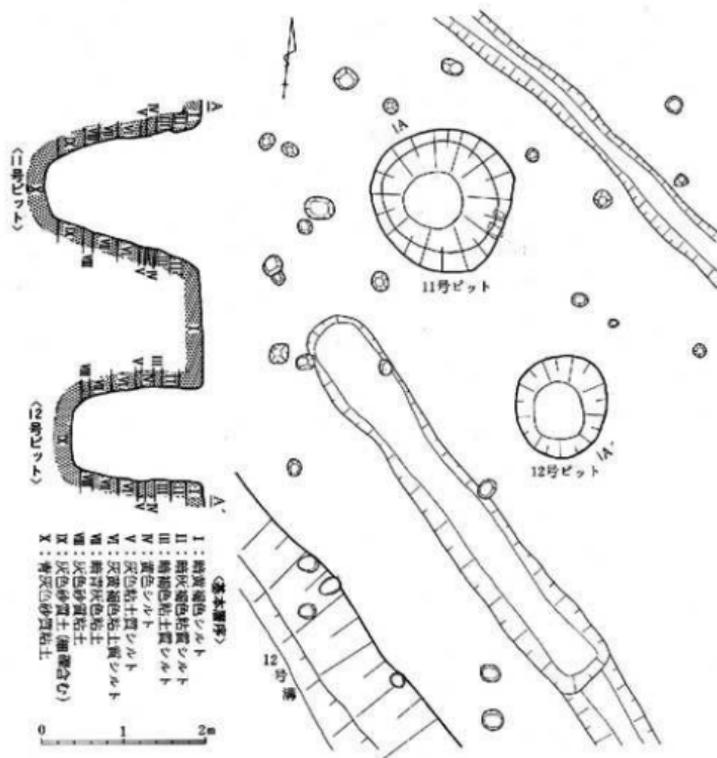
(年代) 柱穴からの出土遺物がないため確定できないが、12号溝(中世～近世以前)に切られているので、下限を近世以前とすることができる。

なお、掘立柱建物跡は、この他に5号溝と4号溝に囲まれた区域に密集するピット群の中にその可能性を有するものがある。

#### E ピット群(第18・19図、写真34)

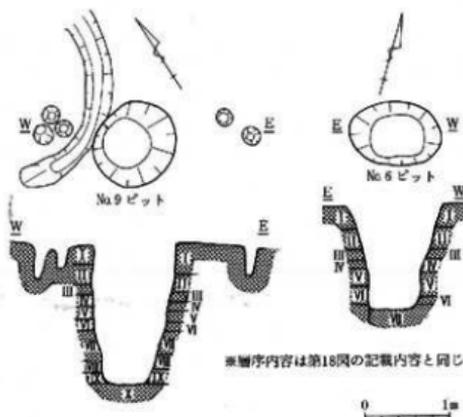
人為的に掘りこまれたピット群は、調査区全域にわたり相当数発見された。検出面は、いずれも基本層序第5層面であったが、本来の確認面はもっと上にあるかもしれない。これらのピット群は、大きさの上から3種類に分けられる。①井戸状大型ピット(平面円形、直径0.6～1.8m、深さ0.6～1.9mで、全般に直径よりも深さの数値が大)②中型ピット(直径80cm前後、深さ25cm前後の正円形のもので、堆積土はしまった黒褐色土で黄褐色シルトをシモフリ状に含み一定している。)③小型ピット(直径20～35cm、深さは一定しないが直径と同じくらいの数値のものが多い。円形のものと同方形のものもある。)、④井戸状大型ピット：第4図中のP5、6、7、8(?)、9、11、12がこれに該当する。これらの配置状況は、いずれも大型溝によって方形に区画された内側に位置する。例えば、P5～7は5号および9号溝の内側に位置し、P9

第18図 No. 11、12ピット付近実測図



~12は11号溝の内側に位置する。このうち、P 5、6、8は平面楕円形であるが、他のピットはいずれもほぼ円形である。断面形は上が開き、中段から下半が垂直に近く落ちこむ、いわば漏斗形ともいえるべき形態を呈し、このためピットの中段付近で稜線を形成するものが多い。

第19図 No. 6、9ピット付近実測図



底面は、いずれのピットもやや丸底気味で、平坦な面を形成するものが多い。深さはP 5, 7, 8は比較的浅く、P 5が60cm(平面115×95cm)、P 7は85cm(直径120cm)、P 8は50cm(130×60cm)で、いずれも1m以下であるが、掘りこまれた状態を基本層序の上から見てみると、地山Ⅳ層の暗青灰色粘土層直上まで掘りこまれているものが多い。また、P 6, 9, 11, 12は比較的深く、P 6が125cm(直径115cm)、P 11は165cm(直径100cm)、P 11は190cm(直径180cm)、P 12は160cm(直径120cm)といずれも1m以上の深さで、前者のピットとは反対に直径よりも数値が大である。掘りこまれた層序は、最も深いP 11では地山Ⅴの青灰色砂質粘土層まで掘りこまれている。結局、いずれのピットにおいても、底面は保水性の乏しい堅い粘土層にあり、水が溜まりやすい条件を具えていることを指摘することがつぎる。ピットの埋土は、上層では暗褐色ないし黒褐色シルトが主成分であるが、中～下層に及ぶにつれ粘土質となる。ピット内からの遺物はきわめて少ない。遺物を出土したのは、P 7の埋土上部から漆器碗破片1点および木の実や木片など、P 9から木の実や板状木片、P 11では埋土下部から須恵器杯(糸切底)破片1点および木片などである。P 9などから出土している板状木片などは井戸枠を構成するものかもしれない。またこれらのピットの時期については、形態などの類似からいずれも類似した時期のものとして、P 11出土の須恵器杯から、平安時代以前には遡りえず、P 7出土の漆器などから判断すると、中世を中心とする時期のものではないかと考えられる。

②中型ピット：第4図中P 1, 2, 3, 4, 10がこれに該当する。配置としては、P 1～4が調査区南部に集中し、P 10だけが調査区東部にある。これらのピットはほぼ垂直に掘りこまれ、底面、壁面とも平坦で、底面コーナー付近は隅丸の状況を呈するきわめて整然としたピットである。

これらのうち、P 2, 4は各々7号、5号住居址内にあるかに見えるが、実は住居址の堆積土面から掘りこまれているものであり、住居址の廃絶した後掘りこまれたことを物語る。また、P 3は4号溝の埋土を切って掘りこまれているので、これは中世以後に掘りこまれたことになる。これらのピットが、どのような機能をもつかについては、墓竈や貯蔵穴のようなものを想定できるが決め手が全くない。

③小型ピット：住居址外の小型ピットは、全城にわたって検出されるが、特に調査区南部および東南部での配置は密度が高い。平面方形のピットもこの地区で多く発見される。これらのピ

写真34 柱根が残存していた小型ピット



ットの機能も、掘り方、柱痕の区別こそ判然ととらえられなかったが、やはり、小型の柱穴遺構と考えるべきものであろう。12号溝南縁で発見されたP13は、形態的には一般的な小型ピットだが、径5～6cm、先を尖らした丸木の基部が高さ50cmほど残存していた。一定の建築物の柱穴とした場合に、何らかの柱穴の組み合わせが見られるべきであるが、今のところ、明確な組み合わせが見られない。個別的なピットの形状は様々である。浅く丸底風のもの、深く垂直に掘りこまれたもの、斜め方向に掘りこまれたものなどである。小型ピット内からはほとんど遺物は発見されていない。また、小型ピットの掘りこまれた時期についても不確定である。

#### F 埋甕遺構 (第21図1・2・3、写真35・37-1・2・3参照)

埋甕は、調査区北東隅の2ヶ所において検出された。いずれもほぼ類似した2個体分の土師器甕を合口で横にした状態で埋設したもので掘り方も確認された。検出面は第3層上面である。このうち、埋甕①はほぼ南北方向に長く2個体分の土師器甕が埋設されたもので、いずれも土圧のため押しつぶされた状況を呈していたが、南側の個体は完全なものであり、割れこそあるが破片は散乱せずまとまっていた。高さは40cm、口縁幅30cmほどである。北側の個体は口縁部が完全に南側の個体と密着していたが、口縁から15cmくらいの高さまでしか遺存していなかった。埋甕の軸方向はおよそNE7°前後である。埋甕はほぼ掘り方の底面に接したような状況にあったが、掘り方の形態、大きさは、およそ南北方向に長い楕円形である以外確定できなかった。なお、埋甕内部からは何も発見されなかった。埋甕②は、埋甕①の北東2m付近、調査区の壁面にかかったもので、これも、合口で横にした状態で確認されたが、間もなくいたずらなどの為、南側、調査区域内のものは、紛失してしまった。北側の部分は、トレンチを拡張した結果、ほぼ良好に確認できた。これも土圧のため押しつぶされた状態で、破片はいく分散乱気味であったが、ほぼ埋没状態を推定することができる状態にはあった。それによれば、埋甕の軸方向はおよそNE57°で、土器は埋甕①と同様の土師器甕である。土器は口縁を欠失したが、底部および本体は完形に近く、保存良好であった。土



写真35  
埋甕出土状況

器内部からは何も発見されなかった。土器は掘り方のほぼ底面に埋設されていた。掘り方は北半分しか確認できなかったが、短径1.2mほど、深さ10cmほどの楕円形の浅いくぼみ状を呈する。

#### (4) 出土遺物

出土遺物は、総量ダンボール箱にして10箱分で、その9割が土器類である。その他では漆器、木製品類、石製品類、鉄器、鹿角製品、自然遺物などがある。

##### A. 土器類

土器類では、土師器、須恵器、須恵系土器、平安時代のその他の土器、中世陶器、青磁などがあるが、量的に最も多いのは土師器で全体の2/3を占める。

##### (土師器、須恵系土器および平安時代のその他の土器) (第3表)

安久東遺跡出土の土師器、須恵系土器、平安時代のその他の土器について概要を記したい。尚、今回は、観察の範囲を主に、口縁部、体部、底部を連続して観察しうる個体に限定し、破片を含めての観察、分類、考察は本報告にゆずることとした。

##### ① 古墳時代前期の土師器 (第20図、写真36)

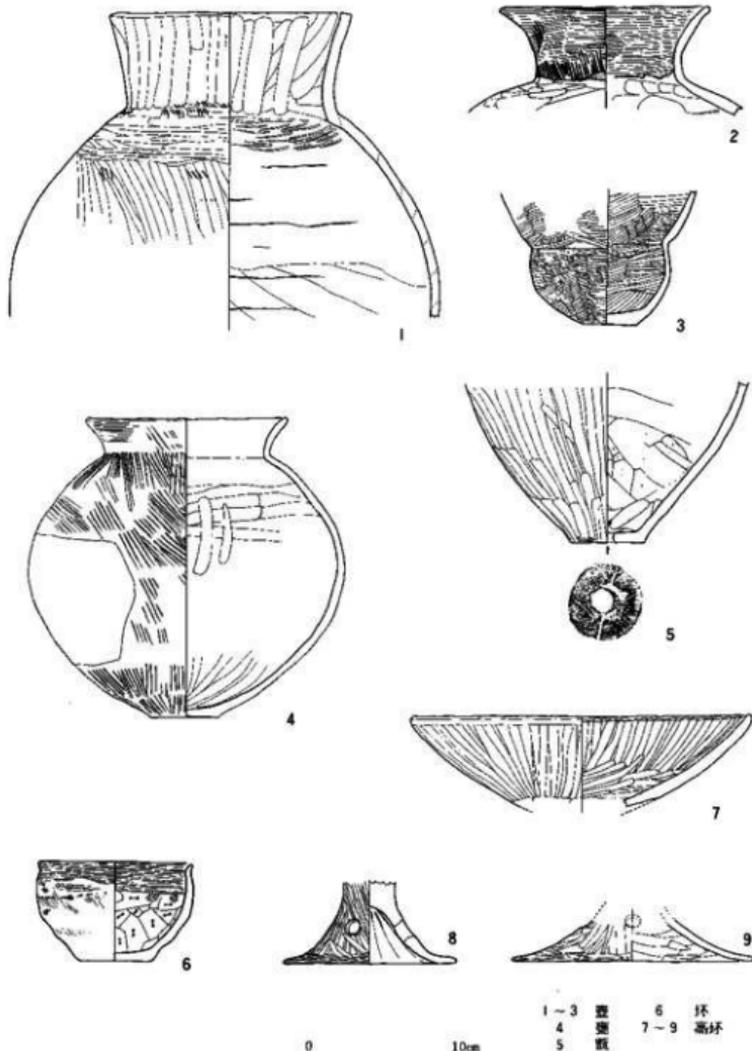
主に2、4号住居跡より出土している。2号住居跡の図(4)(5)(7)(8)は、床面共伴資料である。いずれもロクロは使用しておらず、器種は、壺、甕、甔、坏、高環の5種類である<sup>①</sup>。

壺：大型のものと中型、小型のもの3種類がある。

図(1)は、2号住居跡貼床下ピットより一括出土したものの復元である。球形に近い胴部に、やや外傾する直線的な口縁部のつくものである。口唇部は平坦で断面コの字形を呈する。器高は不明だが、口径15.4cm、頸部径13.2cm、体部最大径27.2cmを測る大形の壺である。胎土に砂粒をかなり含み、色調は外面灰白色ないしにぶい黄橙色、内面は浅黄橙色ないし褐灰色を呈する。焼成は良好で、器質はかなり堅緻である。成形は粘土紐による輪積みによると思われる。体部上半内面には数本のキレットが約2cm間隔で走っている。調整は、まず外面に於て、口縁部から頸部更に体部上半にかけて刷毛目調整がなされ、次に、ヘラミガキ仕上げ(ほぼ縦方向)によって口縁部、体部のほとんどの刷毛目は消され、頸部にだけ残されている。内面では、口縁部に縦方向のヘラミガキ、体部上半では主に横方向のナデがなされている。

図(2)は3号住居跡でP1より一括出土したものである。球形と推定される体部に外反する口縁部のつくものである。器高は不明であるが、口径は13.4cmと推定される中型の壺である。胎土に砂粒を含む。器厚が厚くしっかりしている。外面は橙色ないしにぶい赤褐色を呈し、内面は明赤褐色を呈する。焼成は良好で堅緻である。黒斑現象が認められる。器面調整は図(1)と共通点がみられる。頸部内側には、成形の際の口縁部と体部の接合痕が認められる。外面の調整は口縁部から体部にかけて縦方向に刷毛目調整がなされた後、口縁部は横ナデ、体部は横方向の

第20図 古墳時代前期の土師器



1-3 壺  
4 甕  
5 甗  
6 杯  
7-9 高杯

ヘラミガキで各々大部分の刷毛目を消して、頸部にのみ刷毛目を残している。内面の調整は口縁部が横ナデ、体部上半はナデツケ<sup>④</sup>がなされている。刷毛目は凹線が鋭く、凹線間の間隔の広い点においても図(1)と共通している。

図(3)は、4号住居跡床面で一括出土したものの復元である。口縁端部は欠損している。やや肩の張る球形の体部に内反きみに立ちあがる口縁部がつく。底部は平底である。残存高8.8cm、残存口径13.0cm、底径3.4cm(長径)を測る小形の壺である。胎土に石英粒等の砂粒を含む。内外面は灰色がかった黒褐色ないし黒色を呈する。焼成は良好である。調整は、外面で口縁部をヘラミガキ(横方向)、体部及び底部をヘラケズリの後ヘラミガキ仕上げしている。内面は、口縁部から底部にかけてヘラミガキ仕上げされている。(口縁部、体部では主に横方向)。

図(1)、(2)は、外面体部の刷毛目が頸部以外はヘラミガキによって消されているという共通点を持ち、器形及び器面調整の特徴から東北部の土師器編年における壺釜式の範ちゅうに属すると思われる。

又(3)も頸部のすぼみ、口縁部と体部の器高の比等から壺釜式の範ちゅうに入れて妥当と思われる。

壺：2、4号住居跡より各1点出土している。器面調整が外面及び口縁部の内側が刷毛目、体部内面がナデという点で共通している。

図(4)は、2号住居跡床面より一括出土したものの復元である。最大径が中央よりやや上にある球形の体部と、頸部からくの字形に外反する短い口縁部をもつ。口唇部は丸味をもつ。底部は小さい平底である。器高19.1cm、口径13.0cm、頸部径10.5cm、最大径20.2cm、底径4.3cmを測る。胎土に砂粒を含み、色調は外面にふい橙色ないし赤灰色、内面にはふい黄橙色を呈する。焼成はやや良で黒疵現象が認められる。調整は、外面に於て、口縁部から体部にかけて主に縦方向の刷毛目があり、口縁部では部分的に横ナデが認められる。内面に於ては、口縁部には刷毛目がみられ、体部はナデである。底部は外面刷毛目、内面ナデである(一部ヘラナデ)。なお刷毛目は凹部が鋭角的であり、又凹部と凹部の間隔が広い点が特徴的である。

写真36-5は4号住居跡堆積土最下層で一括出土したものの復元である。肩のやや張った内弯した胴部に外傾する短い口縁部がつく。底部は平底である。図(4)に比して、口径、底径共に大である。左右のゆがみがひどい。口径13.8cm(推定)、底径5.7を測る。胎土に砂粒を含む。色調は外面、浅黄橙色一褐灰色、内面は樹灰色を呈する。焼成は良である。外面の器面調整は、口縁部から体部、底部にかけてほぼ縦方向に刷毛目調整がなされている。口縁部には一部横ナデ痕が残っている。内面の調整は、口縁では刷毛目(横方向)、体部から底部にかけてナデがなされ、部分的に棒状の工具痕が残っている。図(4)、(5)は器形の上で細かい違いがあるが内外器面調整の仕方は、刈田部盛土町大船遺跡1号住居跡出土の壺<sup>⑤</sup>に類似し、土師器編年上の壺釜

式の範ちゅうに属すると思われる。

甕：図(5)は2号住居跡床面より一括出土した。器形は鉢形と推定されるが、口縁部の形態は不明である。底部中央に貫通孔を1個もつ。器高、口径は不明であり、底径は4.8cm(長径)である。色調は、内面、外面ともにぶい橙色で、底部付近は明赤褐色を呈する。胎土に砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。調整は体部外面で縦方向のヘラミガキ、内面ではほぼ縦方向のナデがなされ、底部外面は木葉度がみられ、内面はナデである。なお、底部の穿孔は、焼成前に器体を木炭から雕した後、内から外へなされている。

坏：図(6)は4号住居跡の床面から出土したものである。内湾する体部に短かく外反する口縁部がつき、底部は平底である。内面は頸部に外面に対応する稜線をもち、丸味をもって底部に至る。器高6.4cm、口径9.8cm、底径4.5cm(長径)を測る。胎土に砂を混じえる。色調は内外共にぶい黄褐色を呈する。焼成は良好である。内外面に黒斑現象が認められる。成形は、体部外面に斜めに上がる一条のキレットがみられることから、粘土紐巻上げ成形の可能性がある。外面の器面調整は、口縁部で横ナデ、体部では横ナデを切って縦方向の粗いナデがされている。内面の調整は、口縁部から体部上半まで横ナデされ、体部中央から底部まではヘラナデされている。

高坏坏部 図(7)は2号住居跡の床面から一括出土したものの復元である。脚部を欠損した高坏の坏部である。底部が欠損している。坏部は内湾しながら大きく開く。残存高6.5cm、口径21.8cmを測る。胎土に石英粒、黒色粒を主とする砂粒を含む。色調は外面は一定せず、灰白色、灰黄褐色、橙色の雑色である。内面は橙色を呈する。焼成は良好で黒斑現象が認められる。成形は不明である。外面の器面調整は、口縁部では一部に横ナデが認められ、体部は縦方向のヘラミガキがなされている。ヘラミガキの単位は幅約5mmで規則的に並んでいる。内面は、縦ないし斜め方向のヘラミガキがなされている。

高坏脚部：脚部に貫通孔をもつものと、貫通孔をもたず、裾が広がるものが出土している。

図(8)は、2号住居跡床面から出土した。上端が破損している。円錐台形の部分と裾部からなる。円錐台部に径約1.0cmの貫通孔を3個もつ。残存高4.9cm、裾幅11.1cmを測る。胎土に砂粒(石英粒・黒色粒)を多く含む。色調は、外面淡黄色ないし浅黄褐色、内面は灰白色を呈する。焼成は良好である。外面の調整は円錐台部でヘラミガキ(縦方向)、裾部でナデ(円周に沿って)、内面の調整にはナデツケがみられる。

図(9)は、2号住居跡貼り床下の堆積土より出土した高坏脚部の裾部破片である。器台の可能性もある。裾がゆるやかに広がるもので、貫通孔が1個確認される。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキである。

以上3点は器形、調整上の特徴から東北部土師器編年の塩釜式に該当すると思われる。類

例は大橋遺跡の1号住居跡<sup>⑬</sup>出土のもの等がある。

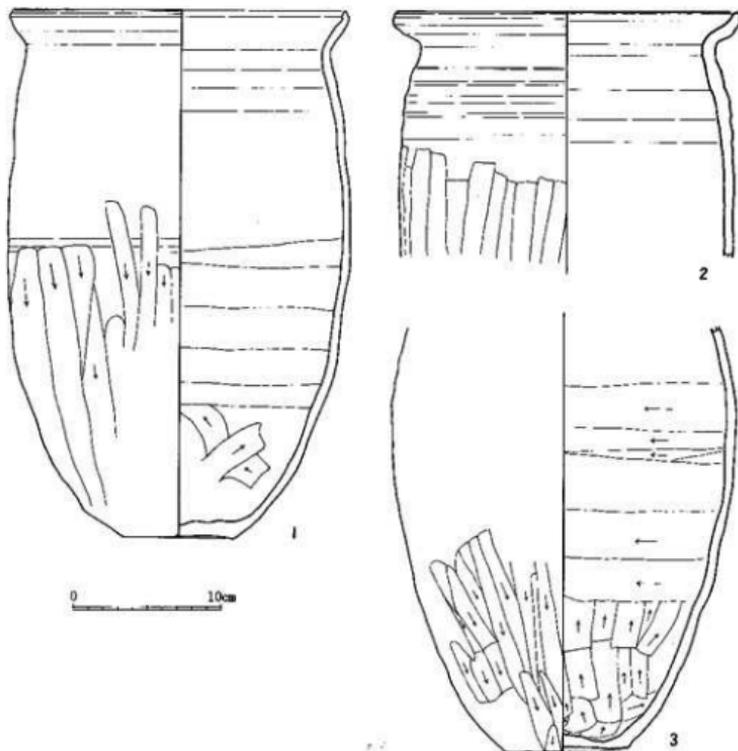
② 平安時代の土師器、須恵系土器、その他の土器(第21・22図、写真37-1-3・5-10)  
イ、土師器

平安時代の土師器は、遺跡の堆積土層(1~3層)、竪穴住居跡(1、5、6、7、8号)より大量に出土し、又、合口埋甕遺構2基から出土している。本遺跡出土遺物の大部分をしめる。いずれも成形もしくは整形の際にロクロを使用している。器種は、実測可能なものでは壺と坏の2種類に限られる。

壺：実測可能なものは5点あり、この内4点は合口埋甕遺構2基より出土したものである。

図(1)は、合口埋甕遺構①底面一括出土のもので唯一の完形品である。長胴で最大幅を体部中央にもち、口縁部は、頸部からくの字形にやや内反さみに外傾し、口唇部で短かく内傾するも

第21図 平安時代の土師器壺



のである。口唇部は、断面三角形を呈す。底部は平底である。器高35.8cm、口径22.4cm、頸部径20.5cm、最大径23.1cm、底径7.9cm（長径）、7.2cm（短径）を測る。胎土は砂粒（石英、黒褐色粒）を含む。色調は、頸部より上が浅黄褐色、体部が褐灰色、内面は褐色を呈する。焼成は良好である。黒斑現象が認められる。内外面ともロクロ調整が行なわれている。器面調整は体部下半に於て外面にヘラ削り（縦方向）、内面にヘラナデがなされている。底部の内外面はナデがなされている。

図(2)は、図(1)と横位で口縁部をあわせた形で一括出土したものである。体部下半以下を欠損している。口縁部は図(1)に比して、内反きみに開いて立ちあがり、口唇部で丸味を帯びながら直立する。口唇部の断面三角形は鈍角である。口径23.3cm、頸部径19.7cm、体部最大径22.7cmを測る。胎土に砂粒をかなり多く含む。色調は内外面とも浅黄褐色を呈する。焼成は良好、体部内外面にロクロ調整痕がみられる。体部の外面は中央より下がヘラケズリされている。

合口埋壘遺構②出土の2つの壘は、1つは下半部（図(3)）、1つは上半部のみが残存している。推定される大きさは埋壘①と同程度である。いずれもロクロ調整がされており、外面体部下半はヘラケズリされている。内面に刷毛目がみられるものもある。5号住居跡ピット埋土中出土の壘の上半部も基本的には以上と共通の器形、大きさ、成形、調整がされている。

環：実測可能なものは7点、1、5、7、8号住居跡及び5号溝の堆積土層より出土している。これらは、①ロクロ使用。②ほとんどが回転糸切り離し。③内面がヘラミガキの後黒色処理されている点で共通している。胎土に砂粒を含み、色調は浅黄褐色ないしにぶい黄褐色を呈する。ロクロ回転の方向は全て左回りである。これらは、回転糸切離し後の調整の有無、種類で次の3つに分けられる。①全く調整のなされないもの（体部下半の一部にナデのあるものを含む）。②体部末端又は底部にのみ手持ヘラ削りを行ない糸切り痕を消しているもの。③底部の糸切り痕をナデ消しているもの。回転糸切非調整のものは、器高4.0～5.0cm、口径13.0～15.0cm、底径5.0～5.5cmのものと、高台付きでこれより1回り大きいものがある。

#### a. 〈回転糸切離し、非調整〉

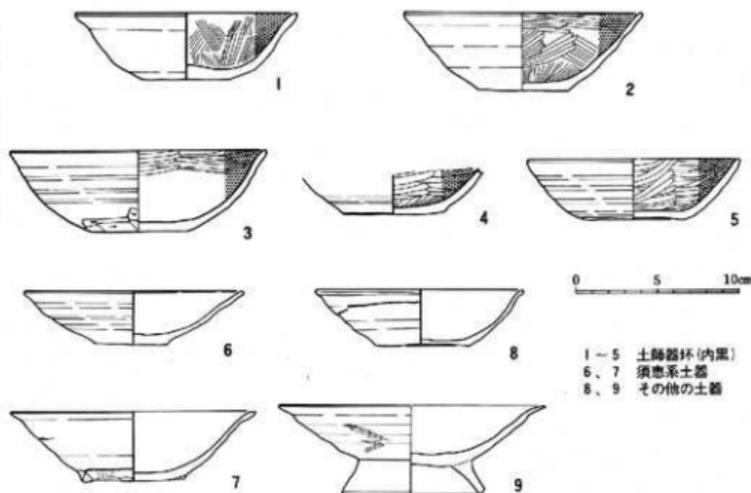
第22図(1)は、7号住居跡床面より一括出土したものである。器高4.5cm、口径13.6cm（推定）、底径5.3cmを測る。

図(2)は8号住居跡、カマド前床面に薄く分布する炭化物層上面より一括出土したものである。体部下半に横方向のナデが認められる。器高4.8cm、口径14.7cm、底径5.3cm。

#### b. 〈回転糸切離し、底部手持ヘラ削り〉

1号住居跡より2点出土している。

図(3)は、体部末端から底部の一部に手持ヘラケズリがされているもので、糸切り痕が部分的に残存している。カマド付近で一括出土したものである。器高5.0cm、口径15.7cm、底径



6.0cmを測る。

図4は、底部が手持ちヘラケズリされたもので、底部中央付近に回転糸切り痕跡が残存している。堆積土1層より出土したものである。器高、口径不明、底径6.2cm。

c. 〈切離し不明、底部ナデ消し〉

図(5)は、1号住居跡カマド付近より出土。器高3.7cm、口径13.0cm、底径6.0cmを測る。

ロ、須恵系土器、その他の土器

安久東遺跡出土のロクロ使用の土器の中で、ロクロ使用期の「土師器」及び「須恵器」のいずれの範ちゅうにも属さない土器が一定量出土している。器形は全て坏である。これらは、以下の点で共通している。①酸化炎焼成（色調は橙色ないし浅黄褐色）②ロクロ使用③底部回転糸切り離し④切り離しの後全く調整（ケズリ調整）がされない⑤ヘラミガキ+黒色処理されているものがない。以上の5つの特徴の中で①に於て須恵器と異なり、⑤に於てロクロ使用期の土師器環と相異する。又、本遺跡出土のロクロ使用期の土師器環と比較すると、①・②・③に於て共通、④・⑤に於て相異している。さて、ロクロ使用期に於て、土師器、須恵器の範ちゅうに入らないものとして桑原滋郎氏が「須恵系土器」を設定しておられる<sup>13</sup>。桑原氏によれば須恵系土器とは、①ロクロ水挽きもしくは巻上げ成形、②糸切りでロクロから離し、内外両面ともに調整を全く行なわない、③焼成温度が土師器より高い（土師器より堅く、色調は明褐色ないし赤褐色）、④黒斑現象が全くみられない。以上の設定基準に基づいて本遺跡出土の土師器、須恵器以外の土器の内て実測可能な9点の坏を観察してみると「須恵系土器」は3点であり、



1



2



3



4



5



6



7



8



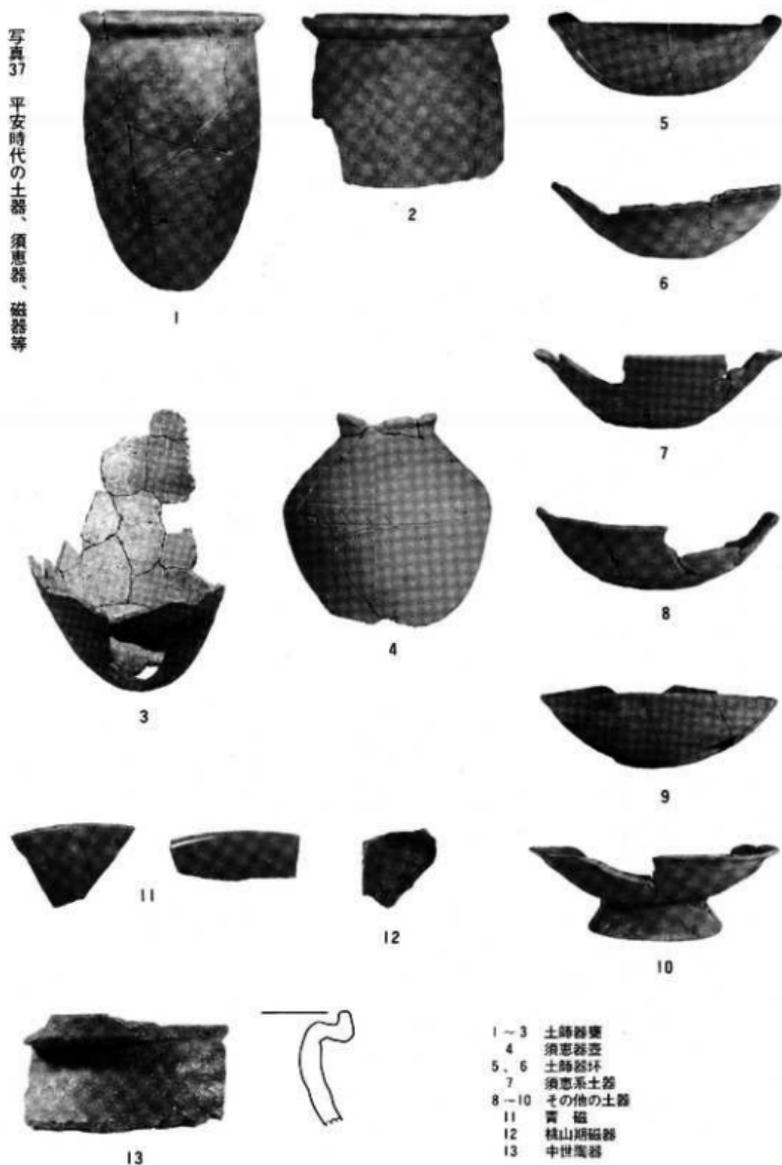
9



10

1-3 壺  
4、5 鉢  
6 杯  
7 甌  
8-10 高杯

写真37 平安時代の土器、須恵器、磁器等



- 1～3 土師器類
- 4 須恵器壺
- 5、6 土師器杯
- 7 須恵系土器
- 8～10 その他の土器
- 11 甕 磁
- 12 桃山期磁器
- 13 中世陶器



その他の坏は「須恵系土器」の概念からもはずれるものである。即ち、2点は黒斑現象がみられ、残り4点は器質の堅さ、色調に於て土師器と変わりなく、再酸化しているものもあって、須恵系土器とは断定できないものである。

須恵系土器：高台のつくものつかないものがある。小型の皿状の坏は出土していない。

第22図(6)は5号住居跡のカマド内堆積土より一括出土したものである。体部から口縁部にかけて直線的に開き、小さな底をもつもので、器厚は薄く3mm前後である。岡田茂弘氏、桑原氏の分類された10-aタイプ<sup>⑨</sup>に類似する。器高3.3cm、口径13.4cm(推定)、底径4.4cmを測る。胎土に砂粒を多く含む。色調は、外面浅黄褐色、内面橙色を呈する。焼成は良好で器質は堅緻である。

図(7)は、高台がつくものである。5号住居跡堆積土1層から出土した。体部はやや内反ぎみに開き、口縁部で丸味を帯びて外反する。器厚は約3mmと薄い。器高4.2cm、口径14.9cm、底径5.7cmを測る。胎土は砂粒を含む。色調は、外面橙色ないし明赤褐色、内面は明赤褐色ないし明赤色を呈する。焼成は普通で、土師器坏のそれと同程度である。

その他の土器：土師器が再酸化をうけた可能性のあるもの一括してとり扱う。5、7、8号住居跡より出土している。①器高4.7cm前後、口径14.8cm前後、底径5.4cm前後のもの3点。②器高3.5cm前後、口径13.0cm前後、底径5.5cm前後の小型のもの2点。

第22図(8)は、5号住居跡床面より一括出土した小型の坏である。体部は内反ぎみに立ちあがり口縁部で丸味をおびてふくらみ外反する。器厚は薄く約2mmである。器高3.5cm、口径12.8cm、底径5.7cmを測る。焼成は良好で外面に黒斑現象が認められる。体部外面に斜めに走る一条のキレツがみられ、巻上げ痕の可能性をもつ。胎土に砂粒を含む。色調は浅黄褐色ないしにぶい黄褐色。内面は浅黄褐色を呈する。なお、本遺跡出土の須恵器、須恵系土器坏、その他の土器の坏の切離しは大部分、糸切り離しであり、ロクロは左回転である点で共通している。

写真37-9は、8号住居跡カマド前部より一括出土したものである。外面の一部が火熱をうけ、赤褐色に再酸化している。器壁もあれているため、ヘラミガキ+黒色処理が行われなかつたとは断定できない。器壁外面に黒斑現象が認められる。器高4.7cm、口径14.9cm(推定)、底径5.2cmを測る。

図(9)は、高台付坏で5号溝堆積土1層より一括出土した。口縁部が平坦で先細りな点に特徴がある。色調は、外面灰褐色、内面黒褐色ないし褐色を呈する。焼成は普通で外面底部に黒斑現象有り、器高5.8cm、口径16.4cm、底径(高台)8.8cmを測る。

#### 〈中世陶器(写真37-13)〉

確実に中世陶器とされるものは、5号溝堆積土2層より出土した甕の口縁部片1点である。口縁部はいったん水平に開いたのち端部は短く直立する。内側には明瞭な段を形成する。口縁

部の内面は木灰がふりかかったせいか白緑色気味でザラザラしている。酸化炎焼成で色調は、灰色がかったにぶい赤褐色を呈する。常滑焼に類似し、年代は口縁部等の特徴から鎌倉時代と思われる。

〈青磁 (写真37-11)〉

破片が2点出土している。2点とも鉢ないし碗形のものと思われる。外面に蓮弁がみられ、釉は灰オリーブ色で、胎土は緑がかった灰白色を呈する。厚さは両者とも4mmを測る。

〈近世以降の施釉陶磁器〉

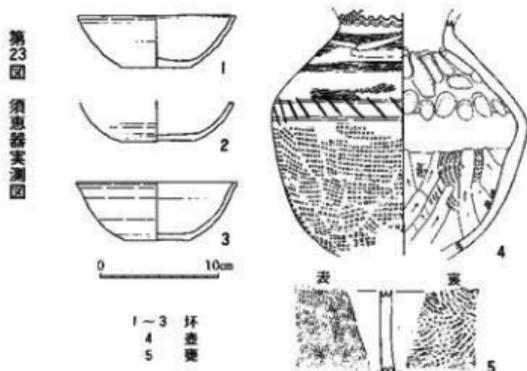
大溝の確認面、堆積上第1層より多量の出土をみる。この中で写真37-12は5号溝堆積土1層より出土したもので、名古屋大学教授嶋崎彰一氏により、美濃産、桃山期のものと御教示をうけている。

〈須恵器〉 (第23図・写真37-4)

器形としては、坏、甕、甗、甗（盗難）などがあるが、小破片が多く、器形を復元できるものは、坏数個体と甗1点のみである。

坏：坏は、すべてロクロ回転糸切底、非調整のもののみで、ほとんどが、1、5、8号などの竅穴住居跡カマド周辺床面から出土した。色調は灰色ないし灰白色で、胎土は砂粒を含み、いく分きめ荒いものが多く、焼成も必ずしも良好とはいいかねるものが多い。成形はロクロ水挽きである。底部に沈線でX字のあるものが1点認められた。

甗：甗はいずれも小破片のみである。坏とは逆に住居跡内出土のものはほとんどなく、大型の溝状遺構の堆積中で河原石などとともに見ることが多く、石室に関連した遺物と見ることが可能である。色調はほとんどが灰色で、焼成は比較的良好、器厚が8mm前後と厚手のものが多く、表にはスノコ状、裏には青海波文の叩き目が見られる。叩きを消しているものは少



ない。

壺：壺では、焼成、色調の点から2種類に分けることができる。一つは灰青色でやや焼成不良、胎土は砂を含みややきめ荒く、表面に波状沈線およびスノコ状叩き目を有するもので第23図4がそれに該当する。もう一つは小破片であるが色調灰白色、胎土精良、焼成も良好で、ナデやケズリなどのロクロ調整の施されたものである。前者は住居跡外の溝状遺構埋土から発見されたが、後者は1、5、7号などの住居跡床面から発見されることが多かった。

鉢：鉢は11号溝北側の3層中で発見されたもので、口縁部を欠失していたがほぼ完形に近い個体であった。しかし、昭和50年11月3～4日に盗難に会い、詳細な記述は不可能である。その概略を記すと、器形はそろばん玉形の体部に丸底風の底部を有し、口頸部は径3.0cm前後と細く、体部の下半には径1cm前後の円孔が1ヶ穿たれる。円孔と同じ高さで、平行方向に椀状に竹べら様のものであるキザミ状沈線文がめぐる。色調は暗青灰色でいく分口然釉がかかっており、焼成良好で器質堅く、器高は17～18cmであった。

以上の須恵器について、その製作年代について考えてみると、坏および壺の後述のものは平安時代（すなわち9～11世紀）、壺と壺の前述のものおよび鉢は7世紀後半を中心とする時期のものと考えられる。

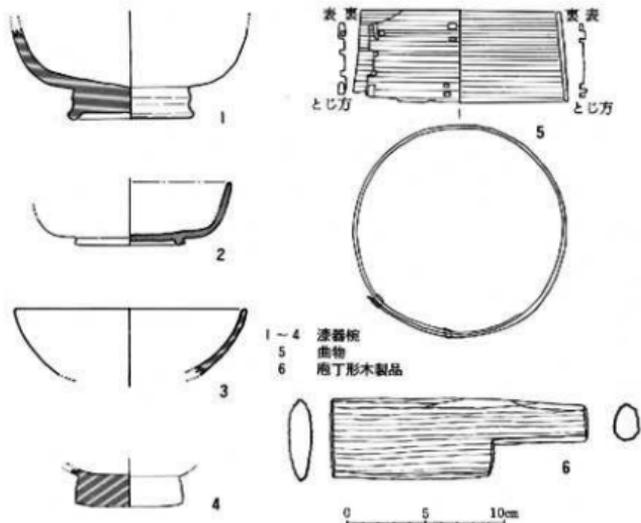
## B 漆器、木製品類（第24図、写真38-1～4）

ほとんどが大型溝状遺構埋土最下層（青灰色粘土層）面で発見されたものである。

### 〈漆器〉

漆器は合計6点出土したが、内1点は盗難にあって記述不可能である。器形はいずれも高台付きの碗であるが、各々が異なる様相をもっている。完形品はない。図(1)、(4)は10号溝、図(2)、写真38-2、4は各々9、5号溝、図(3)は7号ピットから出土した。(4)は底部高台部分のみの遺存体である。この高台は直径6.7cm、高さ2.0cmとやや高く、内側はくりぬかず、いわば、円柱を輪切りにしたような形のものである。体部はほとんど欠失していて記述できない。漆は下地が黒で、朱漆の上塗りか施されている。ただし、底面は黒漆のみである。文様は遺存部に限っては認められなかった。写真38-2は、底部（高台付き）、および体部下端破片である。底部には、低い、内側をくりぬかない高台がつき、体部下端はきわめてゆるやかなカーブを描く立ちあがりを持つ。漆は内外とも黒地である。外側体部下端に、朱漆による筆を使用した直線的文様が描かれている。(1)は、今回発見の漆器の中では最も大きな破片で口縁部を欠失しているが、碗体部および高台付き底部は、ほぼ良好に遺存している。体部は断面U字形の立ちあがりを示す。直径15.0cm、器厚7mmである。底部高台部分は、体部接点部分（径7.3cm）よりも、最下部の直径（径8.0cm）がやや大きい。高さは2.0cmである。底面が高さ4mmほどくりぬいてある。漆は、内側は暗

第24図 漆器、木製品実測図



赤色（チョコレート色）で無文様外側は黒漆地で、朱漆による筆文様が描かれている。高台底面には、筆で細く朱漆の「一」の字が書かれている。(3)は、椀の体部上半破片である。1縁の推定直径は15cmほどであろう。器厚は、ほぼ一様で、1縁部は丸味をおびる。漆は剝落した部分が多いが、(1)同様、内面が暗赤色、外面は黒地に朱文が描かれる。他に低いくりぬき高台付きの底部小破片が1点ある。

このような椀形の漆器類は、発掘調査による出土品としては、知見の範囲では県内にほとんど見ることができない。従ってまた、比較検討すべき資料も見当たらないのであるが、「秀衡椀」(南部椀)や、塗漆法の上で「根米塗」<sup>⑧</sup>と呼ばれるものなどに類似した面を持っており、时期的には平安末～近世前期に属するものと考えられる。

〈庖丁形木製品〉

5号溝から出土した。10.4cm×5.2cmで平面長方形、断面流線形(厚さ最高1.5cm)の一端端部に径2.2×1.5cm、長さ6cm、断面楕円形の部分が突き出た、一見庖丁形の完形木製品である。表面はなめらかに削られているが、特に研磨や塗り物などが施された形跡はない。両端は尖らず、木製品であることからしても、勿論庖丁などの利器にはなりえないが、その用途などは不明である。

〈曲物〉

2点出土しているがいずれも10号溝から出土したものである。(5)は、直径13.5cm、高さ6.0cmほ

ほどの円形容器の部分品で、帯状の薄板を接合部で二重に重ねたもので、上板もしくは底板は失われている。板の両端部は重ねて樹皮でとじてある。いわゆる「わっぱ」といわれるものに属するものであろう。

### (木 杭)

5号溝および10号溝などの底面付近に落ちこんだ状態もしくは、縁辺付近に突き刺さった状態で発見されている。いずれも直径5cmほどの細いもので、先端は荒く尖らせてあるが、それ以外には特に手を加えた形跡もない。

## C 石製品

### (石 臼) (写真38-8)

10号溝の中央部付近の溝縁辺で石臼が2つに割れた状態で出土している。砂岩製。皿部の外側が欠損している。磨面の直径18.5cmを測る下臼である。中心部に直径2.4cmの柄穴が貫通している。磨面は半面がかなり磨減しているが、1.0~1.5cmおきに放射状の刻み目が観察される。磨高10.1cm

### (宝篋印塔) (第25図、写真38-9)

5号溝の堆積土1層から中世~近世における死者の供養塔もしくは墳墓標識である宝篋印塔の塔身部が出土している。

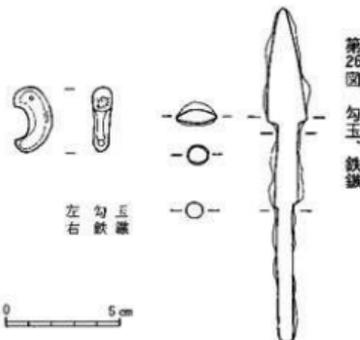


第25図 宝篋印塔拓影

縦13.1cm、横13.8cmの方形で幅約1.5cmの縁をとる。四面に四仏の梵字をあらわすア(宝篋如来)、アー(開敷草王如来)、アン(無量寿如来)、アク(天鼓雷音如来)が刻みこまれている。砂岩製。

### (勾 玉) (第26図左)

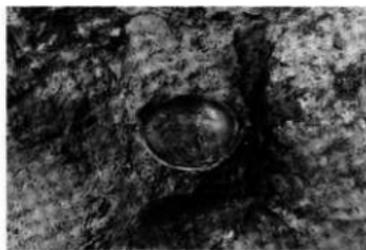
A-4号溝より出土した。メノウ製。片面穿孔で孔尻が伏り込まれたようにくぼんでいる。色調は、頭の部分が暗赤色、他はにぶい黄褐色を呈する。重さ6g。



第26図 勾玉 鉄線

## D 鉄製品

鉄製品類は断片的には随所で発見されたが、いずれも小破片のうえ錆化が激しく、良好に器形を判定できるものはわずかであった。種



- 1-3 漆器碗  
 4 漆器碗 (盗難) 出土状況 = 5号溝  
 5 土物  
 6 恵丁形木製品  
 7 枕  
 8 石臼  
 9 宝篋印塔  
 10 勾玉  
 11 鉄鎌

類としては、鉄鏃、刀子、紡錘車などが認められた。

#### 〈鉄 鏃〉

第26図右は、5号住居跡床面で発見されたものではほぼ完形に近い。全長は14.8cmだが、うち扁平な先端部が5.2cm、某部分が6.0cm、その中間部が3.6cmという構成である。中間部は断面円形で直径8mm、茎は、やはり断面円形だが直径7mmでやや小さい。

#### 〈刀 子〉

刀子は小破片で全形は不明である。

#### 〈紡錘車〉

いずれも小破片で、先端部の糸掛部や円板破片、芯棒破片などが住居跡を中心として断片的に出土した。

### E その他

#### 〈鹿角製品〉

10号溝堆積土下部粘土質層より鹿の角を加工して作ったY字形の製品が出土している。不幸にも盗難にあい紛失、詳細を記しえない。全長約17cm、鹿角の先端を切りそろえ、基部も平らに切られている。根元付近に約1.5cm×約2.0cmの長方形の穴があげられ、木片が残存していた。<sup>④</sup>

#### 〈自然遺物〉

大溝（1，2，4，5，9，10，11号溝）の底面及び堆積土下層からクルミ等の実が相当量出土、スギ、クリ等の自然木、丸太杭も発見された。

## 5. まとめと考察

### (1) 遺跡の形成年代について

安久東遺跡の発見の糸口は、県教委による昭和46年の新幹線予定路線内の文化財分布調査の際に、畑の上で数片の土器破片が採集されたことに始まる。それ以外にこの遺跡に関する信頼性のある記録や文献はほとんどない。ただ、中世においてこの付近に前田氏の屋敷地があった、ということが、江戸時代の「奥羽親蹟聞老志」などにあるようだが、詳細については全く不明である。本遺跡の年代について考える手がかりとなるのは、やはり出土品と遺構のあり方しかないわけである。本遺跡における出土品ならびに遺構の中で最古のものは、古墳時代前期陶器式期（4世紀末？）の土師器および、それを出した竅穴住居跡（2，3，4号）である。従ってこの時期には、本遺跡が人々の生活の舞台となっていたことは確実である。

ただその後、古墳時代中、後期から奈良時代にかけては、今回の調査による出土品の発見は

比較的少なく、また、住居跡も発見されていない。ただ昭和47年8～10月にかけて遺跡西端部（新幹線予定地）が調査された際に古墳石室が当時の副葬品（刀、馬具など）を伴って発見され、また、今回の調査で発見された1号石室もこれに類似する面があり、近い時期のものと考えられることから、引き続き遺跡は存続していたと見てよいのだがそれは生活の舞台としてではなく、むしろ古墳群形成地としてあったのであり、生活の舞台の中心は本遺跡西南0.9kmの栗遺跡などの方に移っていたと考えてよいだろう。平安時代（9世紀以後）にはいと、本遺跡は再び生活の舞台として復活した。4軒の平安期の上上品がある竪穴住居跡の発見がそれを物語る。また小型石室についてはその時期決定についていまだ不確定の要素もあるが、一部では平安期にも造営されていたらしい点が確認されているので平安期の墳墓と考えられる埋塞の発見とも考えあわせて、生活の舞台と墳墓の形成が複合した形で遺跡が存在していたと考えられる。時期が下って、中世以後の遺跡の姿は逆に定かでない。遺構としては、掘立柱建物跡（時期的には中世より遡る可能性がある）、井戸状遺構、柱穴群、溝状遺構、遺物としては漆器碗、陶器類の発見など、中世から近世にかけてのものと判断されるものは多数出土したが、どのような生活の形態を暗示するものか定かでないのである。いずれにしろ、古墳時代初頭から中世もしくは近世に至るまで一貫して木遺跡が継続していることが明らかとなったが、その生活内容の変化の究明はさらに遺跡全体にわたる遺構の配置などが明らかにならないと解決は困難な問題である。

## (2) 遺跡の構成について

### a 集落跡（第4図）

①年代：今回の発掘調査によって竪穴住居跡が8軒確認された。古墳時代前期（塩釜式）の住居跡が2、3、4号住居跡で計3軒（3号は住居跡かどうか不確定）、平安時代の住居跡が1、5、7、8号住居跡で計4軒、時代不明の住居跡（6号住居跡）1軒である。平安時代の住居跡は互いに切り合いはないが、出土遺物によって時期差の生ずる可能性がある。即ち、床面及びカマドから底部回転糸切離してヘラケズリ調整される土師器坯のみ出土する1号住居跡は、5号住居跡のようにカマド内堆積土からいわゆる須恵系土器を出土する住居跡より、平安時代に於ても早い時期に生活の場として機能した可能性が考えられる。

②住居跡の構造：今回検出された竪穴住居跡は、そのほとんどが溝と切合い、後世の削平によって、住居跡のかなりの部分を失っており、そのため、住居跡の平面形、規模、方向、柱穴の配置等の構造の究明が十分になされなかった。又、大溝等によってほとんど壊滅した住居跡の存在の可能性も否定できない。

（方向）：長軸方向が確認できる住居跡では、1、5号住居跡が東西方向、4、6号住居跡

が南北方向、8号住居跡が北東—南西方向である。住居跡の年代毎にみると、古墳時代前期の2、4及び3号住居跡の一边の示す方向が一致しており、平安時代の住居跡は、8号住居跡を除き一边の方向が一致していることは注目される。

(柱穴)：柱穴が検出された住居跡は1、5、7号住居跡だけであるが、柱穴の配置が床面コーナー付近に配置されるもの(1、5号住居跡)と8号住居跡のように、壁の外縁に6個の小ピットが配置されるものがある。

(カマド)：カマドは平安時代の住居跡では全て残存しているが、古墳時代前期の住居跡では確認されなかった。煙道は1、8号住居跡で煙出し状ピットが検出されているのみである。カマドの配置をみると、南壁の東寄りに配置されているもの(5、7号住居跡)と東壁の南寄りに配置されているもの(1、8号住居跡)とがある。次にカマドの構造をみると平安時代の住居跡全てに共通して河原石をカマドの補強材として使用しており、中には、土器をカマドの補強に使っているものも見られ(5号)、1号住居跡を除いて、河原石製の支脚を用いている。

(7号住居跡は支脚の掘り方のみ)又、7号住居跡は他の住居跡と異なり、燃焼部を、地山を掘り抜く事によって構築している。なお、1号住居跡は、燃焼部床面下に板石が埋設されているほか(1号住居跡の項参照)大部分の住居跡でカマドが再構築されているのが注目される。

(貯蔵穴状ピット)：貯蔵穴状ピットが検出されたのは、平安時代の5、7号住居跡である。(一括土師器を出土した2、3号住居跡のピットも可能性あり。)5号住居跡ではカマドの両脇、7号住居跡ではカマドの右脇に、長軸70cm前後、深さ10数cmのピットがあるが、注目すべきことは、再構築されたカマドの時期にはピットはすでに埋められていて、他のピット、例えば5、7号住居跡の西南隅のピットが使用された可能性がでてくる。なお以上のピットの出土品は若下の土師器片と木炭のみであり、確実に「貯蔵穴」を想定せしめる根拠は見い出されなかった。

(その他のピット)：住居跡とは直接関係ないが、5、7号住居跡が埋没した後、この2つの住居跡に共通してほぼ同じ地点に径約75cm、深さ約30cmのピットが掘りこまれている。焼土、木炭を含み、かなり土師器片の出土をみることから住居跡の年代からさほど離れたものではないと思われる。

以上のように概観してくると平安時代の住居跡の方向、柱穴配置、カマドの位置、構造、貯蔵穴状ピット等の点で8号住居跡は他の住居跡と構造的に違いがみられ、また、遺物の上では須恵器環9-aタイプが出土するのに対し、5、7号住居跡は、各々構造的に類似点が多く5号住居跡では「須恵系土器環」が出土している。このような構造の違いが時期差、階級差、機能差などのいずれにもとづくものであるかは、今後の課題として残される点である。

③住居跡の分布：古墳時代、平安時代の住居跡は、共に散在する様相をしめしている。ただしその住居構造において類似する5、7号住居跡はその壁間距離約3.5mと近接している。こ

のほか、前述したように、大小の溝等の遺構により住居跡が破壊された可能性も考える必要であろう。又、平安時代の住居跡の中でも、構造的、年代的に細分される可能性もあり、結局これらの細分された時期単位における住居跡群の分布状況は今回調査区域外の様相をも考えあわせないと確定できない。

④その他の遺構：「集落」の構成単位そのものではないが、発掘区東北隅で検出された平安時代の合口埋蔵遺構は、同時代の竪穴住居跡群とセットになる可能性をもつ点で重要である。その他、集落に於いては倉庫など掘立柱建物跡等も当然予想されるが今回の発掘調査で古墳時代及び平安時代の明確な住居跡以外の遺構は検出されなかった。発掘区東部で検出された掘立柱建物跡は、中世～近世以降と思われる12号溝に切られているが、明確な年代を示す遺物の出土をみだすことはできなかった。

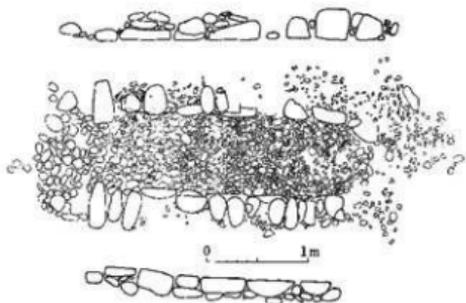
#### ⑤意義

1、古墳時代前期における集落跡は、中川地区最古の集落跡であるばかりでなく、仙台市における最初の発掘調査例であり、住居跡自体の遺存は必ずしも良好でなかったが、床面一括資料等の貴重な資料を得る事ができた。

2、名取川の氾濫原に形成された自然堤防上における古墳時代前期の集落跡の存在は、この地域における沖積地の形成が少くとも弥生時代以前である事を示すものとして重要である。

#### b 墳墓群のあり方

安久東遺跡では、これまで、昭和47年度調査分の1基を含め合計5基の古墳の石室と考えられる遺構が発見された。これらはいずれも、封土および石室の上部がおそらくは耕作などによるのであろうが、ほとんど失われている。この他、すでに述べたように、中～近世の溝埋土中に、大量の河原石が土器とともに発見されていることから考え



第27図 安久東5号石室（昭和47年度宮城県教委調査）  
（安久東遺跡現地説明会資料より）

て、もっと多くの石室が本遺跡においてかっちは構築されていたであろうことが考えられるし、昭和50年2～3月にかけて調査された隣接する安久東遺跡においても、同様の小型石室1基の他、本格的な横穴式石室を有する安久諏訪古墳が発見されているし、本遺跡北側には伊豆野権現古墳や上古川古墳など、やはり横穴式石室系統の石室を有すると見られる古墳群が存在し、また



写真39 安久諏訪古墳横穴式石室



写真40 伊豆野権現古墳

現中田村神社裏手にも石室を構成すると見られる大石（地元では「石のカラド」と呼ぶ。）がころがっていたりして、本遺跡を中心とする付近一帯は一大群集墳地帯であったと考えられる。しかし、その内容は必ずしも一様なものではなく、何種類かのタイプ別けができるし、時期的にも、必ずしもある一時期に集中して構築されたとはいえないようである。



写真41 上古川古墳

①本格的な横穴式石室を有するもの……安久諏訪古墳、(伊豆野権現古墳も未調査ではあるがこの系統に属すると考えられる。)

②内部に各部の分化が見られないが、比較的大型の石室……安久東5号墳(昭和47年調査分)1号墳。

③、②同様、各部の分化が見られず、かつ小型のもの……安久東2, 3, 4号墳、安久遺跡発見石室。

このうち、①、②のタイプは、石室の形態および出土品などからともに7世紀後半ごろの築造と考えられている。7世紀後半には、この他地域によっては横穴群の造営が活発におこなわれる時期でもあり、このような墳墓築造の多様化というものが、きわめて複雑な社会情勢の変動を暗示しているようにも思える。ただ、この時期における集落の形成が本遺跡付近において見られないという点はやはり注目すべき点である。③の小型石室は、築造技術の上では②によく類似しているが、本遺跡の一部で確認されたところでは平安時代ごろまでに下る可能性をもつものである。また、その石室構造がきわめて小型で簡略化されているという点は、たとえ築造技術の面で共通する点があっても、埋葬の形態そのものについてはかなり異質であっだろう

といわざるをえない。むしろその埋葬形態の面では、本遺跡で発見された埋葬の場合と共通する面があるのではないかと考えられる。その埋葬スペースの狭小化といった点は、やはり平安期における火葬符莖的性格を考えるべきなのではないだろうか。ただ平安期においては、本遺跡周辺にも相当の集落の形成が見られ、集落と一体化した形でこうした墳墓群が形成されていた点も①、②の場合と異質のものといえよう。

### C 溝状遺構と中、近世における本遺跡の様相

本遺跡では、多数の溝状遺構が発見されたことが、従来発掘調査例と比較してみても一つの注目すべき点であった。溝状遺構は昭和47年度新幹線予定地内の調査の折にも発見されており、今回調査分のもとの関連あるものと考えられる。今回調査分における溝状遺構は、なおその全容をほとんどあらわしていないにもかかわらず、その占める面積は全体の3分の1ほどにも達する。従って、随所でもろの古代の遺構を破壊して作られている状況が見られた。古代の竪穴住居跡はほとんど例外なくこの溝状遺構によってその一部を破壊されていたし、また、石室遺構の中にもかなり破壊されたものがあつたらしいことはすでに述べた。溝の築成時期は、出土遺物などから考えても中～近世に属するものと考えられ、中～近世に、遺跡周辺で一つの土木工事が行われたことになる。溝を掘ること自体は確かに一つの事業であることは間違いないが、さらに掘りあげられた土をどこへ運搬し、どう処理したかという点もこの土木工事の一つの重要な関連項目であるが、ここではとうていその点まで論を進める余地はない。今、掘りあげられた溝状遺構の性格ないし機能といった点にしばって考えてみると、まず、溝に水が流れていたか、もしくは溜っていたものか、といった点は必ずしも水を流れやすくすることを主眼としたものではないものようである。それは、底面傾斜がきわめてゆるいほか、各溝間の連絡部は浅くなっていて、各溝間をスムーズに水が流れていたとはどうしても考えられないからである。むしろ、水を溜めて区画の隔離をねらったとする方が正しいであろう。区画された範囲は全般に狭小であり、その中に幾多の柱穴状ピットが確認されたが、一般の集落内での区画と見ることはできない。むしろ、遺跡南方を中心としてめぐる溝のある方から考えて、遺跡南方に上要素をおく跡跡をとりまく水濠と考えるのが妥当ではないかと思われる。以上から「奥羽観蹟叢誌」に見える前川氏の屋敷跡と比定することは可能である。美麗な漆器碗、鹿角製品、青磁片や中世陶器破片の発見もそれを裏づけることができる。この場合、井戸状ピットや多くの柱穴状ピットなどは、全体の館の中での付属施設としての役割りを与えることができるだろう。

### (3) 仙台市内の古代集落跡の分布について (第28図)

仙台は伊達政宗が築いた町ということで、それ以前の集落や文化の姿については顧られるこ

写真42 安久良瀬谷西地区の遺構配置状況(西から撮影)

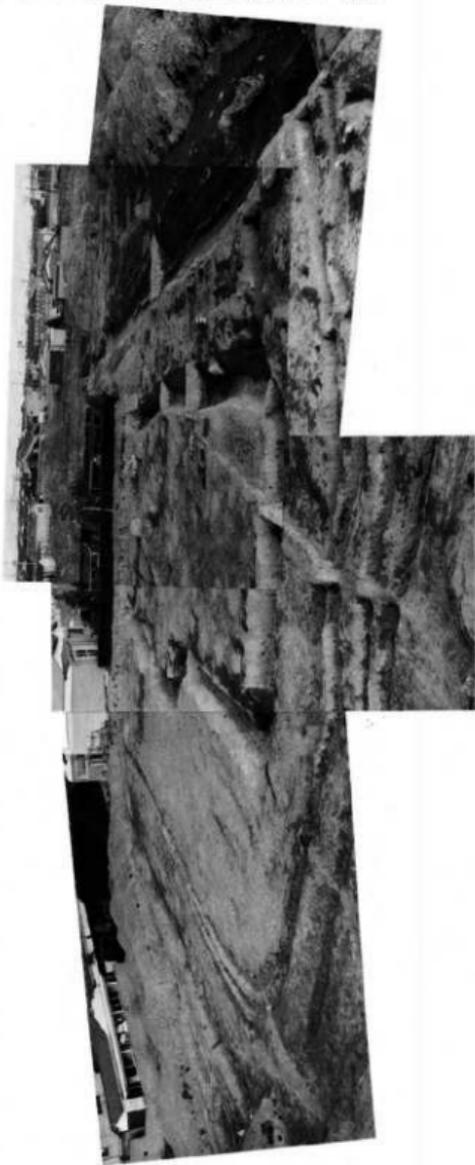


写真43 安久東道跡東地区の遺構配置状況 (西から撮影)



とが少なかった、といってもよい。

仙台では、これまでの所 100ヶ所余りの古代集落跡（縄文、弥生の原始時代集落跡を除く）と考えられる遺跡が確認されている。その分布は、ほぼ市内の全域にわたっている。しかし、このうち発掘調査などによってその実態が明らかにされたものは、ほんの一部であり、それもここ数年來のことであって、他はほとんどその実態がわからないままであり、中には次々と破壊の危機にさらされているものも少なくない。このような状況は、市民自身の歴史意識の上で大きな空白をもつものであって、きわめて残念なことである。今回の安久東遺跡の調査は、そうした仙台における数少ない古代集落跡の調査の一つとして重要な位置を占めるものと考えられる。今ここでは、仙台市内における代表的な古代集落跡およびその調査例などをピックアップしてしながら、集落分布の問題点などについて考えてみたい。

（南小泉遺跡） 遠見塚一丁目、二丁目、遠見塚西地区などにまたがって所在する広大な集落跡である。広瀬川北岸のなだらかな自然堤防上にあるためその範囲をどの程度に限定すべきか容易でないが、ただ、国指定史跡遠見塚古墳をとりまくような状況で遺跡が広がっていることは間違いない。いまだ正式な発掘調査はされたことがないが、時期としては、畑地から出土する遺物から弥生時代初頭（大泉式）から、奈良、平安時代まで継続していたと考えられる。仙台市史 3 によれば、昭和14～16年ごろにかけて、遠見塚古墳東方にある覆目飛行場の拡張工事が行われた際 100軒以上もの竪穴住居跡が発見された、とのことである。その時採集された遺物類は、現在東北大学に保管してあるが、大量の土器類をはじめ石製農具、紡錘車などのほか植物遺存体なども発見された。古墳時代の土師器は「南小泉式」<sup>22)</sup>の標式土器となっている。おそらく、遺跡全体を考えると数万件以上の市内最大の集落跡となるであろう。付近には遠見塚古墳<sup>23)</sup>、法領塚古墳<sup>24)</sup>をはじめとする有数の古墳群あり、陸奥国分寺跡<sup>25)</sup>、国分尼寺跡<sup>26)</sup>は遺跡北方1～2キロ付近にあるほか、条里の遺構も航空写真などで確認されている<sup>27)</sup>。

（郡山地区遺跡群）<sup>28)</sup> 郡山一～五丁目、欠ノ上、篝ノ瀬、北目などにかけて所在する広大な遺跡群である。広瀬川と名取川の合流点付近に形成された自然堤防上に位置する。この遺跡群もいまだ正式な発掘調査はされたことがなく、地点によっては布目瓦が多量出土する点から、地名とも考えあわせて古代の名取郡衙とか平安期寺院跡であるとの説も出されている。しかし、住居跡こそ確認されていないが、それ以外の古墳時代集落跡から出土する遺物類も多量出土しており、付近に広大な集落が形成されていた点は否定できない。

（大野田遺跡群）<sup>29)</sup> 長町大野田字袋前、元袋、六反川などにかけて所在する。名取川の支流で釣取方面に水源を発し、西多賀耕地を蛇行する山荒川の両岸の自然堤防上に位置する。荒川に沿って細長い範囲に遺跡の広がりが認められる。今まで発掘調査されたことはないが、畑上で多くの上器類の散布が認められるので、集落跡と考えてよいだろう。時期は、弥生時代中

期から奈良、平安時代まで一連の遺物がある。ただ、中に埴輪の破片なども散見できるが、これは、付近に埴輪をめぐるす小古墳があったことを物語るものかもしれない。

〈岩切鴻ノ巣遺跡〉<sup>9)</sup> 岩切字鴻ノ巣にある。七北田川南岸に形成されたなだらかな自然堤防上に位置する。範囲は確定できないが、河岸に沿って相当広大な範囲を占める。昭和47年12月～昭和48年6月にかけて遺跡の一部が東北新幹線建設予定区域内に含まれるため、その事前調査が二度にわたって県教委によって実施され（面積 1,100㎡）、2軒の竪穴住居跡（南小泉式期）と焼土遺構、井戸などの他、土師器、須恵器、中世割器、石器、石製模造品などの発見があり、古代から中世にかけての集落遺跡としての実態の一部が明らかにされた。

〈中田町遺跡群〉 この中には、今回調査された安久東遺跡の他に、昭和49年2月～3月と、昭和50年2～3月にかけての2度にわたり、東北学院大学によりその一部が調査された栗遺跡および、昭和50年2～3月一部調査された安久遺跡とが含まれる。いずれも、現名取川南岸およびその旧河道沿いに形成された自然堤防上に位置する。栗遺跡は「栗皿式土師器」<sup>10)</sup>の標式遺跡であり、地形的にやや小ぢんまりとまとまった微高地上にあるが、これまでの調査で、主として奈良時代ごろ（栗皿式）の竪穴住居跡15軒および多量の出土品の発見があったが、他の集落遺跡に比して短い限定された期間に形成された遺跡である点が注目される。安久遺跡は、地形的に見ても、遺跡内容の上から見ても、安久遺跡と全く同じブロックの中に入れてよい遺跡である。発掘調査によって、平安時代の竪穴住居跡10軒および溝状遺構が確認されている。

これら主要な古代集落遺跡は、いずれも仙台市内を東西に貫流する3つの主要河川（七北田川、広瀬川、名取川）の沿岸に形成された自然堤防上に位置する。その中でも特に、広瀬川、名取川の合流点付近に位置する南小泉遺跡、郡山遺跡などは、広大な範囲にわたる集落跡を形成している。その背後には広大な後背湿地を控えていて水田跡などの存在を予測させる。こうした点は、市内の主要な原始時代集落跡の多くが丘陵上に位置することと比較して興味ある対照をなす。

仙台の古代集落跡の調査は、まだその人口にさしかかった程度でその実態について多くを語ることはできない。だが少なくとも仙台の発展のあけぼのは、伊達政宗仙台築城にあるのは決してなく、その千年以上も前から開けた地域であったことをその分布状態などは物語る。

今後の課題の解明は調査の進展に待たねばならないが、特に他の関連遺跡の問題もあわせ考えないと調査の進展は望めないだろう。例えば古墳群との関連、条里制と集落の配置の問題、交通路との関係といった点があげられる。

第28図 仙台市内の古代集落遺跡分布図



- 1 南小泉遺跡
- 2 郡山遺跡
- 3 大野山遺跡
- 4 中野山遺跡
- 5 中野山遺跡

## 6. む す び

今回の調査は、その規模、調査期間、導入人員などの面で、仙台市内において、従来実施された発掘調査の中では、昭和30～34年に行われた陸奥国分寺跡の発掘調査に次ぐものであり、仙台市が主体となって実施するものとしては最大規模のものであった。調査総面積 3.716㎡、調査期間は、昭和50年7月の災害から昭和51年2月の酷寒の季節まで、延べ 156日を要し、調査に従事した人員は延べ 1,171名に達した。またブルドーザー、バックホ、ベルトコンベアーなどの重機類もフルに援用しての大発掘であった。その結果、仙台市南部における古代から中世にかけての農村集落跡の事態ははじめて明るみに出、郷土の歴史研究の上で、また市民の歴史意識に対して一つの大きな成果を提示した、しかしながら、度々述べているとおり、昭和50年11月におきた調査事務所への侵入、資料の盗難といった事態は、あらゆる面において、我々、文化財を保護し、郷土文化の発展を願うものにとって重大な問題を提起している。言うまでもなく、このような資料の紛失は調査成果そのものの重大な欠損であり、郷土にとって、市民にとって共通の損失である。ここで問題となるのは、資料そのものに対する考え方の問題である。調査によって出土した資料は、郷土全体の歴史の解明へのカギを握るものであり、それらは公共的な活川に供せられるべきものである。発掘調査は、出土品も含めた総合的な遺跡のあり方を追求すべきもので、決して広探しのものであってはならない。こうした考え方がまだ十分に理解されていない点に今回のような事件が発生する余地が生れるのであろう。これは、啓発のしかたの問題であると同時に、我々自身が改めて銘記しておかねばならない点であろう。管理が不十分であった点は弁解の余地がない、資料は唯一無二の価値をもつということを改めて銘記し、出土品の管理保管には万全を期さねばならない点など深く反省し、今後、一度とこのような不祥事がおこらないような配慮してゆきたい。

〈 註 〉

- ① 菊地武一「仙台の金石文」(仙台市史第5巻、1950)
- ② 仙台市中田第一十地区面整地組合「安久遺跡発掘調査略報」(1975)
- ③ “ [栗遺跡発掘調査略報] (1975)
- ④ 宮城県史第5巻
- ⑤ 宮城県教育委員会「安久東遺跡発掘調査現地説明会資料」(1972)
- ⑥ “ [清水遺跡現地説明会資料] (1975)
- ⑦ 註②
- ⑧ 氏家和典「東北上師器の型式分類とその編年」(『歴史第14輯』1975)
- ⑨ 岡田茂弘、桑原澄郎「多賀城周辺における古代环彩土器の変遷」(宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要I、1974)
- ⑩ 註⑤
- ⑪ 土器の色調の表現は、『新版 標準土色板』(日本色研事業株式会社1973)による
- ⑫ ナデツケとはいわゆるナデよりも器面を強くなでつけた結果、ナデツケ単位の浅いくぼみの両辺で粘土の高まりが見られるものである。註⑫文献の土師器の器面調整観察基準による。
- ⑬ 宮城県教育委員会「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(刈田郡蔵王町地区)(+) 大橋遺跡」(1973)・第47図-10
- ⑭ 註⑫ 第47図-6
- ⑮ 「宮城県多賀城跡調査研究所年報1971」および、註⑨
- ⑯ 註⑨
- ⑰ 註⑨ および、橋崎彰一「須恵器編年図表」(日本の考古学VI、1967)等による。
- ⑱ 田中作太郎「飲食器」(日本の美術No.9、1967)等による。
- ⑲ この類例は、滋賀県大川の湘南遺跡で出土しているが、それによれば、弥生時代の遺物で、耕具の一種とされている。滋賀県蒲生郡安土町近江風土記の丘資料館で実見。
- ⑳ 伊東信雄「仙台市内の古代遺跡」(仙台市史第3巻、1950)
- ㉑ 伊東信雄「遠見塚古墳」(宮城県文化財調査報告書第1集、)
- ㉒ 註⑧
- ㉓ 仙台市教育委員会「法領塚古墳調査報告書」(1972)
- ㉔ 宮城県教育委員会「陸奥国分寺跡発掘調査報告書」(1961)
- ㉕ 仙台市教育委員会「史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書」(1969)
- ㉖ 仙台市史図録編纂委員会編「目で見る仙台の歴史」(1959)
- ㉗ 註⑫
- ㉘ 宮城県教育大考古学研究会「宮教考古5」(1973)
- ㉙ 宮城県教育委員会「東北新幹線関係遺跡調査報告書I-(5)岩切鴻ノ巣遺跡」(1974)
- ㉚ 註⑧

## 仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物霊巖下セコイヤ化石林調査報告書 (昭和39年4月)  
第2集 仙台城 (昭和42年3月)  
第3集 仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書 (昭和43年3月)  
第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書 (昭和44年3月)  
第5集 仙台市南小泉法道塚古墳調査報告書 (昭和47年8月)  
第6集 仙台市荒巻五本松宮跡発掘調査報告書 (昭和48年10月)  
第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書 (昭和49年3月)  
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書 (昭和49年5月)  
第9集 仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書 (昭和51年3月)  
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報 (昭和51年3月)

---

### 仙台市文化財調査報告書第10集 安久東遺跡発掘調査概報

昭和51年3月発行

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL (25)6466(代)

---



国立国会図書館シンボルマーク